

911.158-Ta56ㄅ



1200500755405

911.158



始



911.158

PA56



文學博士 福井久藏 著

高山彦九郎
歌集

高山 朽葉集

山一書房刊行



高山朽葉集卷之六

信濃 矢島行康編集

贈高山正之歌 并序十九首

ちり塚の序

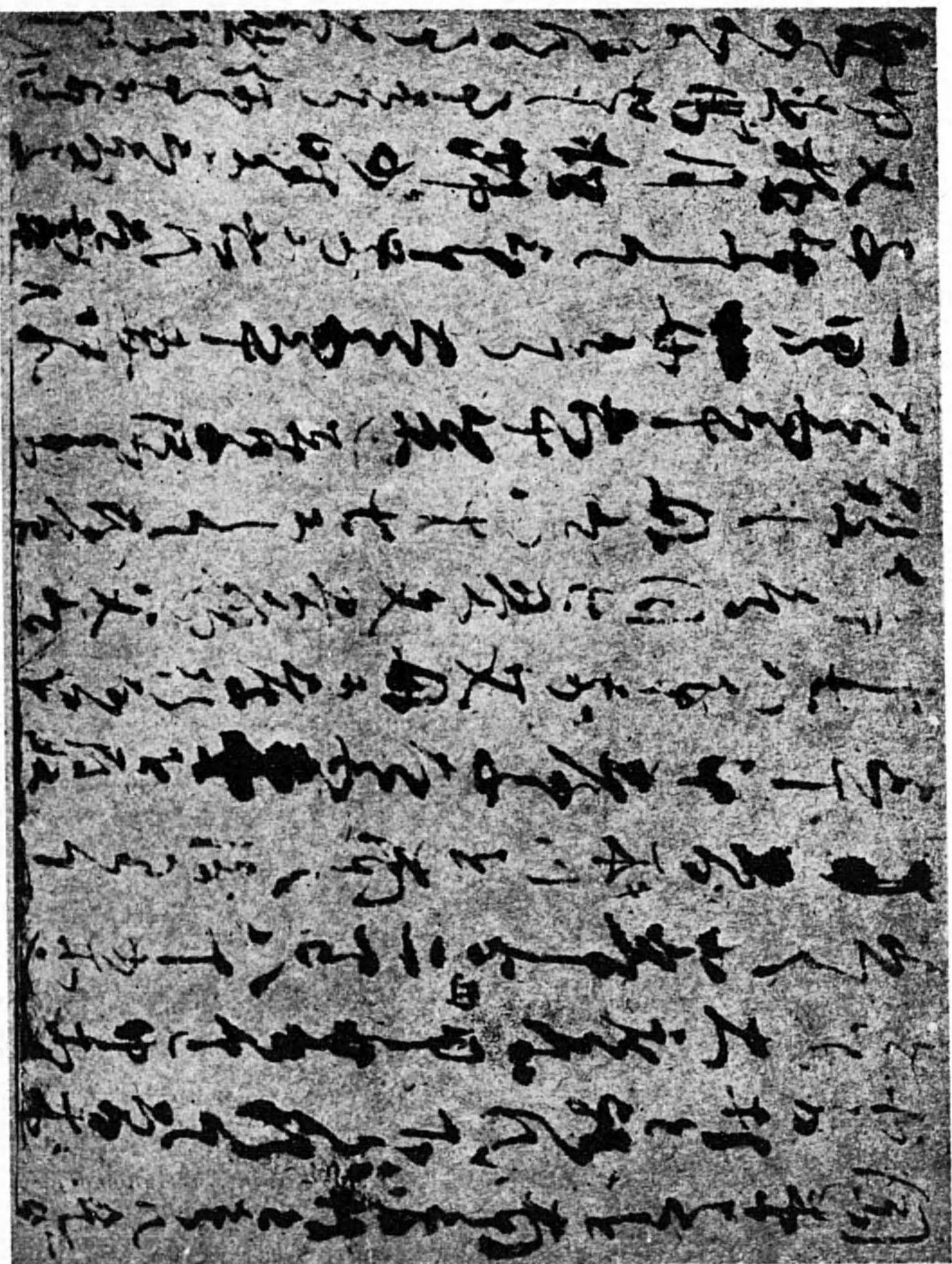
高山正之

小 さ き 壺 埃 も か い あ つ む る う ま に と く 是 ひ き
 の 山 石 以 せ ひ 廣 こ り か す う な る 名 の 流 是 ち 流
 是 流 る よ 志 ち う ひ て 千 寿 の 澗 ち と ハ 集 け ら し
 古 し 一 今 の 人 し 世 小 あ る 酒 り と 酌 の 新 羊 比 あ
 由 と 小 さ く ひ て 辨 め け る 其 の 去 の 景 の 壺 埃
 又 在 ひ て 不 ち ひ 久 る 人 事 と 惜 し み て 目 子 ぶ き

994
121

謹みて本書を

矢島行康翁の墓前に捧ぐ



(藏氏雄秀馬有) 部一の本原記日中旅肥豊日

本
目
次

矢島行康翁の遺稿

目次

序……………〔一〕

凡例……………〔一〕

解題……………〔一〕

矢島行康翁小傳……………〔一〕

 高山彦九郎歌集 高山朽葉集……………〔一〕

 聖上御製……………〔三〕

 皇后宮御歌……………〔三〕

 高山朽葉集總目錄……………〔五〕

 高山朽葉集卷之一……………〔七〕

 高山朽葉集卷之二……………〔二五〕

 高山朽葉集卷之三……………〔七三〕

目次

一

高山朽葉集卷之四……………〔四〕

高山朽葉集卷之五……………〔三三〕

高山朽葉集卷之六……………〔三七〕

高山朽葉集卷之七……………〔六九〕

高山朽葉集卷之八……………〔一〇〇〕

高山朽葉集附録……………〔一〇六〕

註……………〔三九〕

高山氏略系譜……………〔三〇〕

年譜……………〔三七〕

海野訪問の記……………〔一〕

附録

高山正之 日豊肥旅中日記……………〔一〕

寛政四年

序

高山正之先生の名は、國民學校の幼い子供でもこれを知らないものはあるまい。夙く西南の諸藩に勤皇の念を吹きこまうとして東奔西走、遂にその志の酬いられぬを慨いて久留米に於て自盡されたのは洵に惜しいことであるが、これによりて後進に一層その精神を鼓舞した力は尠しとしないのである。

三條大橋の上に坐し皇居を拜し奉りて涙を流したのは、泣き癖のあるためでもなければ奇を好むためでもない。寛政の三奇士とたゞへる奇の字を私は好まぬ。松籟艸に

大御門そのかたむきて橋上に頂根^{うね}突きけむ真心たふと

と橋曙覽はうたつてゐる。げにその通りである。祖母の喪にあたり、上州は太田の金山の麓にあるその墓側に假庵をつくつて三とせの喪に服したのも、賣名のためにする輩とは、天地霄壤の差がある。

上州は長脇差の徒が多いといはれてゐるが、安政の獄や坂下門の變をみても、立派な

勤皇の士が出てゐる。關邪論を著した大橋訥庵や兒島草臣の如き男子ばかりでなく、女流にも範と仰ぐべき婦人を多く出してゐる。倭文舎集をみると大橋卷子は、夫の精忠を思ひ浮べて、

天翔る魂のゆくへは九重の御階のもとをなほや守らむ

と詠じてゐる。手弱女でもかういふ風な心地をうたつてゐるのはその家庭の教育、溯ると郷土の先進の感化が與つて力があると思ふ。

和歌は國民文學として長い長い傳統をもつてゐる。これに囚はれてはならないが、傳統の尊さを古い歴史をもつてゐる我が國民の如く切實に感ずる民族は少いと思ふ。ことにそれが勤皇家の心裏から流れ出たものであるときは一層みつしりと後の國民の心をとらへる。私は大分夙い時代に「勤王和歌集」を撰んだことがある。また昭和の早い頃に「近世和歌史」を出しその始に

いにしへの道わけわびてゐる喪屋のとまよりもれて雪はふりけり

の至孝の歌や

天足らし國たらしたる大御代に満ちたらしたる月の影かな

の詠や、畏くも 光格天皇が草莽の微臣たる我身を知召すと承り、

われをわれとしろしめすとや皇の玉の御聲のかゝる嬉しさ

と詠んだ作などを擧げ且高山朽葉集にも觸れておいたが、未だその全集を出すに至らなかつた。今や時局艱にして、全國民が奮起して横暴を極める敵國をうち斥け、八紘爲宇の古來よりの大きな傳統の精神にもとづきて以て東亞諸國の指導者となり、世界の平和を將來せんには、山に臥し野に寝ね、天地を貫く精忠の御國魂を發揮せねばならない。この秋にあたり、正之朝臣の如き精忠の人の肺腑から出た三十一文字に接觸することは洵に緊要なことゝ信ずる。

更に高山朽葉集に添うるに日豊肥旅中日記を以てすることのできたのは喜びである。

この原本は有馬秀雄氏の家藏で、昭和十七年朝臣の百五十年祭に際し、久留米の高山彦

九郎先生慰靈會より覆刻頒布せられたものを底本とし許を得て本書に收めたのである。右は朽葉集と内容上の交渉深く、讀者の便益少なからぬを思ふてのことである。

尙朝臣の事歴に就いては、「高山芳躅誌」を始め、西川玉堂氏の「高山正之朝臣」などの書に譲りて、こゝには高山氏略系譜及び年譜を編んでこれに代へることとする。

今高松宮家本による高山朽葉集の覆刻に當り、特に公刊の御允許を賜はりし高松宮家に對し奉り感恩の微衷を披瀝し奉る。更にまた本書の刊行に賛せられ、種々御助力を與へられた内閣情報局及び特にその衝に當られた第二部文藝課長井上司朗氏に鳴謝し、又矢鳥家本の閱覽を許容され、矢鳥行康翁傳につき御示教を與へられた矢鳥憲三郎氏に對し、茲に深甚の謝意を表す。又日豊肥旅中日記の掲出につき、快諾を與へられた有馬秀雄氏及び高山彦九郎先生慰靈會に對しても深謝を捧げる次第である。

昭和十九年二月十一日

校訂者しるす

凡例

- 一 本書の覆刻に當つては、高松宮家御藏本の御貸下を乞ひ奉り、宮家本と、同本により夙に引寫せる家藏本とを對校し、これを底本とした。
- 一 原本には句讀點は一切施されてないが、讀者の便宜を考へ、校訂者に於て適宜これを加へたことを諒せられたい。
- 一 本書には全く濁點符を加へてないが、一二の意味の紛らはしき場合の外一切底本によることとした。送假名の如きも飛て、讀て、積し、推はやの如く活語の語尾を送らぬものも皆底本のまゝとなした。但し覺てとある如く、覺えてか覺めてか紛らはしきものは旁に細字も加へて意義の混亂を生ぜぬやうに註記したところもある。また多くとか如しといふに多ふし如しとあるが如きもそのまゝとし、叨に改定を加へないで旁に細字で註記したのは、原本の體裁をそのまゝに存せんとの微意によるのである。
- 一 その他は原本の衍字假名遣の誤謬等もその儘に掲げ、判定し難き箇所は旁にマ、と記し、明白なるものは正字若しくは正しき假名を旁に記しておいた。○は判讀不可能の箇所である。
- 一 註は本文中に番號を附し、卷後にまとめて簡單に解説して擧げた。本文によりて分明なるもの、

又はあまりに高名周知の人物や地名等はこれを省き、地方的人物小地名等を校訂者の調べ得たる限りに於て掲げた。

一 附録とせる日豊肥旅中日記は久留米に於ける高山彦九郎先生慰靈會本を底本とし、尙校訂者に於て若干の補訂を加へた。

一 本書表題の文字は、宮家本の題簽より影寫したものである。

解題

高山朽葉集一部八卷は信州海野の偉人矢島行康翁の撰にかゝる勤皇家高山彦九郎先生の歌集である。

先生の歌は歌を以て立つ人のそれとは比すべきではないが、その肺腑から迸り出た三十一文字は世道人心に關する作が少くない。自分は大正の半ば頃「勤王文庫」の一篇として「勤王家歌集」を撰んだ時に先生の歌若干首を収めてその中に收めた。また高松宮家御藏本高山朽葉集を拜見し、御許しを得て夙くうつして家に藏してゐた。

栗田栗里翁の出された「高山仲繩遺墨」をみると、京日記の跋に信州の矢島文庫のことを叙し、矢島行康翁が山陵古社及び名族忠臣の遺跡の荒廢して傳らざるを慨き、自ら山野を跋涉してこれをたしかめ、また古器を愛して古典の殘闕に徴せんとせられ、家に國書萬餘卷を藏せられてゐるが、その多くは稀觀の書であると誌されてゐるのに、その文庫がどうなつてその子孫の方がどうしてゐられるかを調べることを怠つてゐたのは、思へば随分迂濶のことであつた。

去る夏の頃三島吉太郎氏が井上哲次郎博士の紹介を以て私の瑤光書屋を訪れられ、自著の蒲生君平全集を恵まれて、談たまたま高山正之先生の和歌のことに及んだ。氏のいはるゝに、正之先生の歌集は、唯一本が宮内省に存すると聞いてゐるが、調べても分らないとのことであつたので、そこで高松宮家本によりて亡妻の影寫して置いた家藏の寫本を示し、寛政三偉人の研究に長い間志を深めてゐられる貴下がこれを世に紹介されるやうにとお勧めしたが、固辭し、却つて私にと勧められた。時にわが教子の文學士市村宏氏が來合せ、これまた私に本書の出版を慫慂された。よりて宮家に本集の出版につき御允許を乞ひ奉つたところ、早速 宮家吉島事務官より御允許の趣を御通報に接したので、あらためて宮家本の御貸下を願ひ、家藏本を校訂し、更に地名人名等の固有名詞の一般に解し難いものには註をも加へて活字に附することとした。

たまたま友人から、矢島文庫には從來世に知られない正之先生の旅日記を澤山に珍襲され、その日記は近く群馬縣にて出版の計畫があるといふうはさをも耳にした。

矢島翁の丹精に成る、彦九郎先生の日記遺墨を廣く集められた玉廻御聲一百卷が世に出ることになつたのは洵に喜ばしいことである。然るに矢島翁のことが國學者傳記集成

並にその續篇にも觸れてないのは洵に遺憾の至である。かういふ篤志家のことは十分に顯彰しなくてはならぬ。

高山先生の盟友の一人であつた藤塚式部の曾孫藤塚鄰博士、及び市村學士と共に私は昨年矢島家を信州小縣郡本海野村に訪れ、當主憲三郎氏の款待を受け、備さに同家の貴重な資料をみせて戴き、且行康翁の事蹟に就いても一通りは明らかにするを得た。この御好意に對し深く謝意を表する次第である。當主憲三郎氏は日大史學科の出身で、いまは郷黨子弟の薫育に従つてをられるが、他日これが研究をものせられる御意向と承つた。吾人は一日もその早からんことを祈望して止まざるものである。この高山朽葉集は宮家本を底本とし、別に矢島家本との校合は行はなかつた。蓋し宮家本はもと矢島家より出たもので、全く同一本であるからである。

さて高山朽葉集は八卷より成り、

卷之一 六十八首

卷之二 四百四十一首

卷之三 百二十八首

卷之四 七十八首

卷之五 二百四十六首

卷之六 贈高山正之歌 九十九首

卷之七 贈高山仲繩文 二十二章

卷之八 贈高山正之詩 百十二首 附長歌六首

と目録になつてゐるが、卷六以下はちり塚の序、高山真正墓碑、同正教墓碑、奉祖父置文、遣悶作を除いては、すべて諸家の正之先生に送つた詩文である。

この家集を一見するに、他の集の如く四季戀雜等の部立はない。

卷一は安永二年春二月(二十七歳)から寛政元年冬に至る旅中の作を旨と集めてある。まづ京都の友人高芙蓉等に送られ北陸に旅立つところから始まる。純忠な正之は、皇室といふことが寤寐にもその念頭をはなれなかつた。皇城を拜して洛外に至つた時

思ひきや越路の雪に旅寝して都の春をよそに見んとは

と詠じ、江州小川村に到り藤樹書院をみ、三月三國街道の側なる新田義貞の冢に詣で、

同六年には叔父の劔持正業と赤城山に登つて互に詩歌をよみかはし、また一人で碓氷嶺をこえ雪の淺間をながめ木曾の八勝を賞したりしてゐる。天明二年二月には大坂の懷徳堂で開講があるので彼地へ赴き酒一樽鯛一折をそへて祝意を表し、上段の客席に列りて孝子の話をし、聽者堵のやうであつたと記してある。

天明三年正月には東坊城勘解由長官のとりなしで、紫宸殿上の拜觀をゆるされ、皇統綿々寶祚無窮のみしるしを拜し奉り感激がさはまり無かつた。萬歳樂をみて、

七重八重袖に包まん九重の雲井をもる、萬代の聲

と詠じてゐる。嵐山に遊び將軍地藏開帳にいつた歌もある。

友人の某氏が神書を人に始めて貸すときには、國恩に報いるといふ志がなくては、神書は判らないといひ、神道は、天子御味方の連判狀の如しなど説くのを聞いて、それは世が衰へ名分を亂るためにさういふ説が起ると歎き、

古しへを仰げば高き我國の道の教をかゝるべしとは

と辨じ、我が祖先を祀るに眞に丁寧な儀を以て事へるやうにした様子が窺はれる。孝子節婦の名を聞きては、はる／＼と訪ねて到り慰めたもので、それらの歌詠も時にみられる。土佐の貞婦横田氏の妻が詠んだ歌をきゝめて、その神風といふ言葉をとつて

神風のいせの濱荻筆の海くみてぞ思ふ大和歌人

の歌を詠じてゐる。天祖の天壤無窮の神勅を拜しては

神風になびくや廣き天が下民の草木の數ならぬ身も

と常にこの國に生れた喜びと勵みとを述べてゐる。

卷二には詞書はないが喪に服した頃の作を集めてあつてその數が最も多く、純孝の心がにじみ出てゐる。祖母の喪にあたり、冢側に假庵を作つて叔父と共にそこで三年の喪に服した他に類例のない至孝の人、その心裡がよく謠はれてゐる。蓬頭長髯よごれた上下をつけて死に事へることが如くであつた。

しぐれかと空を仰げば雲晴れて木の葉の落る音にぞ有ける

ぬれつゝぞ野邊のかり庵篁をあらみもりくる月のかげぞ悲しき

喪屋悲し悲しく思ふ筈なれば春吹風もなみだにぞきく

袖の露に見ればや空もおぼろにてなみだに曇る春のよの月

かげ淋しともしく見ゆる燈火を友となしつゝ夜をあかしぬる

かへり見る三年の春になりぬれば藤の衣もつゞれなりけり

哀れにも春をぞしりておくつきの上に生ぬる草も花咲く

あきふしにつけても思ふなく／＼も在しむかしの朝な夕なを

卷三は寛政二年の作を収めてあつて、蝦夷遊行を企て、まづ湯島明神に祈願し、六月二十九日には鹿島の神に詣で湯殿三山を訪ひ、象潟を過ぎつた。さうして蝦夷千島ロシ

ヤをかけて渡海しようとしたが、季節がわるくて出船がむつかしいと船頭善四郎が異見するのに従ひ、その壯行は見合せることになつた。

渡るべき潮路有りやと詠むれば荒磯浪の外が濱風

と詠じてゐる。歸路には旅宿に困つてあばら屋に宿り、疊席をひつけて寒を凌いだこともある。拒絶された家で歌をよんで辛うじて泊めて貰つた場合も少くない。關所で切手や往來の書付を持つてゐないと尤められた時にも、國士の態度で堂々と意圖を披瀝して通して貰ひ、その守人に

關の戸をさすやよな／＼詠むらん浦山敷もすめる月哉

の一首を贈つた。その間にも錦木塚・壺の碑・野田の玉川・光堂・東稻山等の名所古跡を探ることを怠らなかつた。また沿道敬神の人、淳朴な民などを褒めて歌を與へたことも少くない。琥珀山にいそしむ民をみては

行末は限りも知らず玉や出ん山口しるく我れいはひつる

と禱り、泊めて貰つた百姓の主が夜の更けるまで白挽に忙しげなのに感じては、

いとまなみ夜半とも知らず賤が家の杉の板目の月ぞ更ぬる

と詠んで與へてゐる。

鹽釜では祠官藤塚知明と歡をかはし、富山に登りては

雪に隠れ風にあらはる富山の望に及ぶ言の葉もなし

とながめ、仙臺の茶臼に林子平の兄嘉膳の宅に宿ること十日、子平とも歡を交した。

五百年の末の松山外が濱浪風立し蝦夷が千鳥も

と海國兵談の印の歌をうけて詠んでゐる。

京都御所が出来上つて御還幸の儀がま近くあることを、白川の關のあたりで醍醐三寶院を立つて來た人から聞いて、

翅あらば飛ばんとぞ思ふうらくと雲井の空を仰ぐ嬉しき

と詠み、十一月晦日大津に着きある橋の下にて手水をつかひ禮服をつけ、三條橋上に坐し、頓首して寶祚の長久を祈り、

陸奥の八重の山路を跋分てけふ九重に入るぞ嬉しき

と胸中をのべてゐる。

卷四は、主として寛政四年京都在留時代の作を集めたもので、或は芝山持豊卿の歌會にまじり、岩倉具選卿と贈答したり、伏原三位の釋奠の詩を和歌に詠じたり、諸卿に従つて鞍馬に赴き、或は嵐山に遊んだりして、草莽の臣ながら勤皇の志の深いのを知られた。さきに正之が聖護院宮の人となりて舞樂拜見に出たことを、勿體なくも 光格天皇が知召し遊ばされたことを知り感激に堪へず、

われをわれとしろしめすとや皇の玉の御聲のかゝる嬉しき

と詠みいよいよ奉公の誠を竭さうと誓つた。志水南涯よりの知らせで縁毛龜を得、

君が代の榮ゆく色や緑なる龜の尾ながき春ぞ嬉しき

と詠じ、三月廿八日仙洞御所にこれを奉るの榮を得、今上陛下の「むぐら生ひ茂りて道も分かぬ世に」の御製を拜し奉り、百拜の後、

夏草の心の儘に茂れどもいつかは秋に逢はで過ぐべき

と詠じてゐる。或は諸卿と叡山に登り、潜に謀るところがあつたらしい。

第五卷は寛政四年から五年にかけて九州へ旅行し熊本藩士や薩摩の士人と交歡をかはし、密に勤皇運動に心を盡し、その事成らずとみるや、遂に六月二十七日久留米の森嘉膳の家で自殺するまでの作を多く収めてある。即ち四年正月元日には熊本城下藪孤山の邸にありて春を迎へ、麻上下にて帝京の方を拜し、諸神の拜、祖先の拜をなし、

四方の山霞長閑に春の來て帝都の空に向ふ嬉しさ

の歌を始とし、蓮臺野に檜垣姫のあとを尋ね、柏原山姥と唱和したり、時習館に遊び、馬場の笠懸をみたり、藩儒と交を結んでゐる。中に神武紀元を唱へ皇道發揮に志の篤かつた高本李順とは心の底を語り合せてゐたらしく、その忘我亭で語つてゐる時、山鳩が

飛び入つたので、

足引の山に住むてふ鳥さへも知るや隔てぬ友垣の道

と詠んでゐる。富田大淵が異國の事を承らうといふのを聞きて、

むすこへやこまの戎の猛くとも我をやいかで襲ひ來らん

と答へてゐる。或時は樺島石梁の別荘の詩歌の會に臨んだり、熊本を立つ時には見送る人も頗る盛んで、その詩歌は旅の袋に満ちた程であつた。

二月廿八日には八代郡宮の地に西征將軍宮の御墓を拜し、矢筈岳をよぢたりして薩摩に入らうとし、野間關では

薩摩人如何にやいかに苜萱の關も戸さぬ世とは知らずや

と關守に示して薩州に入り、孝子孝婦良民を尋ねたりして四月鹿兒島城下の赤崎海門の宅に入つて款待を受け、造士館の教授山本正誼等の諸儒と島津兵庫の明霞園に遊び歌を

よんでゐる。鬼界が島へ渡ることを願つたが許のないので、

白雲を分けつゝ來れば薩摩海沖の小島に浪ぞかゝれる

と詠じ、海門山に上り山川に遊び、近衛信尹公（實はその父前久）配流の地を訪ひ、谷山に赴き、五月には加治木に赴き、霧島岳に登りて、

皇の始すめらみを開らく高千穂に登りて仰ぐ天のさか鉾

などと詠みて肥後に歸り、島津家から戴いた上布と高本李順の袴ととりかへて着て、互に親しく歌をよみかはしてゐる。筑前の詠もあるが六月廿七日「心に思ひ定むる事ありて」と題し、

松崎の驛うまやの長ながに問ふて知れ心筑紫の旅のあらまし

朽果て身は土となり墓なくも心は國を守らんものを

の二首でとぢめてある。屠腹直前の作である。家を忘れ身を忘れ一意奉公の念が酬いら

れないで、四十七春秋ではかなく久留米遍照院の上になつた精魂氣魄がみられる歌集である。昨年百五十年記念として出された高山彦九郎撰集に収めた勤皇家故植村俊平の輯めた歌集は僅々その一部に過ぎない。

卷六には人々の正之朝臣に送つた歌を主とし、その歿後追悼の歌、その遺族の作を集めてあつてその數合せて九十九首に上つてゐる。中に生前に寄せられた作はこれをちり塚と名づけて自序がある。その人々の中には芝山持豊、平松時章、西洞院信庸、外山光實、日野詳光等の公卿並にその公子を始として學者志士も少からず、また肉親の人としては祖母、母、叔父、子女もあり、嗣子義介六歳の時の作もあり、長女十二歳せい、次女八歳のさとの歌もある。京都遊學から歸郷を惜しまれる歌、祖先に吉田家より神號を贈られたのを祝ふ歌、叔父正業と祖母の墓側に喪屋を作り、三年の間、死に事へることを生に事へるが如き孝行を感じる歌、その自盡を悼む歌、正業が久留米に來り亡甥の祭典を營みこれと交渉ある歌等を含み、讀者の心胸につき入るが如き作に接し、そゞろに仲繩先生の高風を欽仰せしめるに餘がある。

附け加へやうと思ふことは友人中蘭學の泰斗として聞えてゐた前野良澤との交渉の如

きは特筆すべきものがある。正之が良澤のことを伏原二位へ申上げたことや、良澤が天文曆數の上ばかりでなく、紀公子の囑を受けて築城術を譯したり、カムチャツカの地圖や風土記を内々譯してゐる消息を述べたり、また正之の蝦夷地へ志して旅行を企てられた日から日々の晴雨をも書留めて置いて歸後日記の天氣と對照してみようと志してゐる消息も窺はれ、またこの蘭化先生が萬葉の書體を用ゐて書いた歌を贈ることや、又正之が神代文字と想像される古字五十字の物語に基いて異邦の八種字考の稿本に更にムスコヒヤの文字を加へ九種考となすことなどもみえてゐる。また良澤と同じ中津藩士の莫逆の友築又七次正の記によると、水戸の長久保赤水が東湖の父藤田幽谷へ送つた手翰によれば、心喪三年の服喪をよく勤められたことを幕閣に立たれた松平越中守定信朝臣が聞かれ特に御褒美下さる内意にて態々江戸へ呼出された時、兄專藏が代官の指金を受けたのか法度の禁法を行つてゐた旨訴狀に及んだので、急にその模様の變つた次第もみられる。御と、さまへと小さな子供の可愛らしい作や、土佐の萬葉歌人楠瀬清の古調の作も交り、それ等の關係が知られる面白い一巻である。

卷七は文の部として自他の作二十二篇を収めてゐる。正之のは祖父貞正、父正教、先

妣劍持氏の墓誌や柳井氏の哀詞と祖父に奉る置文の五篇で、他は柴野栗山、皆川洪園、樺島石梁等の碩儒の送つた文や、菅茶山の正之傳より、久留米の森嘉膳の認めた自殺の次第、藤田一正と木村謙の祭文や、仙臺の志村時泰が仲繩の需によりての藤氏兄弟復讐の記事、劍持正業が父貞正の遺物讓書等正之傳やその資料として正確にして讀者の心胸を捉へるものが少くない。叔父正業の認めた祖父の遺物を歿後二箇月目に調べてみたところが、日頃儉約して人に知らせずに貯へて置いた古金一千兩があり、これは子孫の私寶とせず天下有用の爲に用ゐよとの遺言のあつたことが分り、正之の祖父へ奉る置文には、十八歳にして潜に家を出て京都遊學に上るとき金は持たずに、帶刀は學者の法であるから、藏の寶の中、備前兼光の刀、菊一文字の脇差だけは取出しましたので、これは饒別と御思召下されと斷つて出た消息が知られ、栗山の文によると、弊衣から綿がはみ出し、劍の鞘は半ば剥けてゐたとある。その古愚軒に於ける對談の狀が目に見えるやうである。栗山の送つた文に江戸のことを東都としてあつたので、正之が名教上から尤めたこと、栗山はこれは差支はないが、その志を美としこれを削つて江戸と改めたことも附記してある。樺島公禮が高山氏楠公論の記には、正之が室直清の孔明との比較説を

みて、この愚儒が論としてその書を取投げたこともみえてゐる。

卷八は詩の部で自他の作百二十九篇を收めてある。正之の詩は首中尾三首だけで、始の遺悶作は「生平慷慨幾時休、高位顯官非我求」で起し、中間に「霸謀隆盛偏堪惡、王道陵遲實可愁」といふところ、その精神が窺はれる。十九歳で上京始めて門に入つて教を請うた岡恕齋より、安藝の頼春水、大坂懷徳書院の中井積善、水戸の長久保赤水、藤田一正、下野の蒲生君平、肥後の藪孤山、樺島公禮、高本李順、薩摩の山本正誼、赤崎貞幹、京都の公卿及び大江資衡等のことを記してある。その他に於ても偉人の面影は髣髴としてその人に接する心地がする。この書には引いてないが、その後發見された墓前日記の一部天明七年六月二十六日の條に、

今年七月二日は新田義貞四百五十年忌に當れり。名主に仰せられて、農業休日あらしめ村民に思はしめ玉へ、新田郡は義貞を以て顯はる。昔年七月閏月の年も江戸より家兄へ申して休日あらしめ、其時は三左衛門老分なれば金龍寺へ惣代に立ちぬ。云々とその忠臣追慕の心を郷土人に植ゑつけようとしたことがみえて尊い。

次に附録として收めた日豊肥旅中日記は、久留米藩老で朝臣と交渉の深かつた有馬守居翁が愛藏せられ、その末孫有馬秀雄氏の現に襲藏せらるゝ朝臣の同地方旅中手記である。今、守居翁自筆の「高山正之書捨拔萃」の跋文を掲げて解題に代へる。

高山正之彦九郎と號す。野州新田郡の處士なり。夙に孝義を以て稱せらる。平素皇國の學に志し厚く、操守質實、眞に一奇士也。嘗て雅量ありて遠遊を好み、四方を周流して奇跡を探る。寛政中九州に來り、經歷する所の事跡詳に小冊に誌して筐中に蓄ふ。其稿文に非ず章にあらず、鄙俚忿雜、聊忽忘に備るのみ、敢て外見を憚るものゝ如くしかり。正之歿せんとする時、悉く是を破碎し残るところ纔に豊肥日三州の殘編、餘は三四葉の關簡破牘のみ、僕適是を得て思ふ、徒に函底に秘して蠹に供せんよりや、寧同志とともに、靈區を老究し、寂寞閑夜の友となさば、恐らくは正之が素志にも叶ひなんと。此頃竊に是を抄出し、一冊となしぬ。妄に大方の觀覽を憚るのみ。嗚呼正之歿してより爰に十稔、しばし僕と交遊する事ありしも更に前日の如し。彼一度び冤を蒙り、其事暢ること能はず、恥なきを恥るものゝ如し。其志も又憐むべし。終を能せざるを以て一槩に貶すべからず。其遺書に臨み、悼然

として後へに記すことしかり。

于時享和二壬戌庚仲種望前一日、阪低窩に識す。

守 居

尙これの附載部分は殘闕斷簡で、京都日記の一部も交つてゐる。

以上簡略を旨として本書の解題に代へる。

矢島行康翁小傳

行康は通稱吉太郎、信濃の人、天保七年一月一日同國小縣郡本海野村に生れ、平田鐵胤の門に入り國學を修め、夙に高山正之先生の勤皇の大義に透徹せる精神を欽慕し、その日記遺墨遺品の蒐集につとめること三十餘年、購入の道なきときは千里を遠しとせず、みづから往きて筆寫した。斯くて先生と交を結んだ人々の贈答の詩文をも汎く集め、終に

玉の御聲 百卷

玉廼御聲拔萃 四十五卷

高山朽葉集 八卷

高山錦囊 二十六軸

を集成するに至つた。

行康は一面實業方面にも力を盡し、岩倉右大臣の富國策に共鳴して養蠶業に力を注ぎ、蠶種製造を業とし、明治初年信濃地方に於ける斯業興隆のために貢獻するところ多

大なるものがあつた。

明治十一年九月、天皇の北國御巡幸に際して扈從された岩倉具視卿は、海野の矢島家に到り民情を聽かれ、また正之先生の遺墨を一覽せられた。蓋し卿の父具選卿は寛政の昔先生と特殊の關係をもつてゐられたためといふ。

明治十一年十一月岩倉公の執奏により、玉廼御聲百卷及び拾遺を天覽に供し奉り、同二十年十二月土方宮内大臣の執奏により、高山日記及び高山錦囊を天覽に供し、江戸日記一帙三卷及び高山錦囊(第四)一軸を奉獻し、紅白の縮緬二匹を御下賜あらせられ、以て家寶とした。

同年十二月三條太政大臣より賜錦堂の家號を贈られ、また逍遙院實隆公筆新勅撰集二卷一帙、尊圓法親王御筆の和漢朗詠集切、牡丹華宵柏筆の詠百首切等を贈られた。

行康は明治二十八年二月二十二日、享年六十歳を以て天壽を終へた。

附記 本稿は翁の孫に當る矢島家の當主矢島憲三郎氏の御示教に俟つところである。

高松宮家御允許

高山彦九郎
歌集
高山朽葉集

聖上御製

久爾能多女古々路都九之天
多可也麻廼伊左保毛奈新耳
波弓之阿波禮佐

皇后宮

奈峨羅弊天以麻與仁安良婆
多加夜萬乃他加幾伊左保毛
丹天麻之茂能乎

卷之七

贈高山仲繩文二十二章

卷之八

贈高山正之詩百十二首

附 長歌六首

高山朽葉集總目錄 終

高山朽葉集 卷之一

贈正四位高山正之歌六十八首

安永四年春二月十八日丙申京都丸太町油小路西へ入所、高孟彪(二)字孺皮なる人芙蓉と號せるの宅を日の七つ前に立て、北國の方へ趣き侍る。其時に元真なる醫師の來り合せけるか共に孺皮と門前迄送り出ぬ。孺皮なる人の妻子迄も甚名殘おしけに見え侍る。吾も又將に泪に潤さんとせり。かゝる時に元真來らさる前は、孟彪も吾もしはし泪にて立去難かるべき所なりき。孟彪の妻なる人も夫の心を心とす。さればいと懇に早時は過ると申。中食の爲に認めたれはとて梅干或は柿の餅など火にて乾はかしたる杯を取認て送らせけり。孟彪夫妻兒女婢女に至る迄皆まつ毛を濡せり。道の腦(三)みなきやうとて、打合たる元真迄吾影の見えさる迄立て送りける。吾も歸り見ていと名殘しく覺へ侍る。今日は雨も降りいと物さひしきやうにそ有ける。丸太町を東へ行き、境町(四)の中村儒生へより、暫し名殘を告て出ぬ。九重の御門なれば、境町(二)御門を敬みて拜し奉る。京極通

へ出て巽(七)の御門を又拜し奉り、清和院(四)御門を遠く拜し奉り、右の方中御靈(五)の社を拜し、西向ひ拜殿を出猶北へ往きて石薬師御門を遠く拜し奉り、たうのさいの神の東にて、和田之壁(六)字克明荆山と號せる儒士の宅へ尋ね入て、暫語り侍る。是より今出川通を東へ往く。早近きには上京の事もあらしと思ひ(八)は王城の名殘敬み畏れみくくとて遙に帝城の方を遠く敬みて拜し奉る。是より洛外なり。時によめる

思ひきや越路の雪に旅寝して都の春をよそに見んとは

安永二年二月二十三日中江藤樹の古跡を訪ひければ、先つ上り玉へといふ故上り、禮服して藤樹の書院(七)を見る。南向四間に八間の講堂也。藤樹の神主を開きみせぬ。拜す。

又繪像をみせぬ。深衣服用の姿也。常省先生とて藤樹の三男學を繼げる人の神主もあり。藤樹と並り。其東に聖像を飾る處也。西の方東向にて藤樹か先祖の神主あり。此上に致良知(八)の字をすかして有り。藤樹眞書のよし也。篆書也。書院床と俗にいふ上の處也。疊(九)五疊敷の間也。一間疊也。次の間講釋所也。二つの床有、東に床有り、書院床西の間にも床有、合天井也。其所に一間あり。七疊也。西は八疊敷高所に一間有、其東に休息所有。今はふさきてなし。南外に縁有。藤樹先生を思ふてよめる。

名にしあふ小川の星やいさぎよく今に流る、藤浪のもと

天徳寺村西の山より瀧落。一丁半なり。ある人に瀧の名を問へばしらすと答ふ。故に

若狭なる遠敷(九)の山の瀧なれば四の瀧とや名は流すらん

安永二年三月新田義貞(一〇)の冢に至る。まき島より十町餘り、田中三國街道より右十間計りのより也。碑の邊七八間四方杉數株あり、碑は下二段也。一の下臺五尺五寸二段合高三尺三寸石長サ六尺七寸横一尺九寸皆奥行は少し短かし。表に新田義貞戰死此所とありて、裏に萬治三歲在庚子二月建之、自沒斯至于今年三百廿五歲とあり。西向也。吾拜して忠臣の人を感せしむるは甚しきものかな。湊川にて楠子の墓にては落涙數刻に及ふ。新田子は同郷の親みあれ共楠子の感には及びかたし。心は公なるもの哉。唯涙は忠の厚きに多(一)ふし。北二丁計りに川有り。是を赤川といふ。義貞の首を洗ひし所と聞てよめる

武士の名をや止めし赤川に弓張月の影そ流るる

安永六年丁酉冬十一月朔日に赤城神社(二)を拜し奉らんと正業叔父思ひ立給ひ、我も從行の定めあり

ぬ。これによりて十月三十日とくより起き、家人に旅の糧なとしたよめしめ、叔父至り玉ふと待
奉りぬ。また夜半過る頃にて暫にして鶏告げる。我こたひのみにしもあらねと、寝ね侍りても旅
立の時はねむる事あたはず。

旅といへはいさむやいかに我れしらす己か宿りに寝むられもせず
一夜二夜しはしと思ふ程なれと身のならばしの旅ねなるらん

とよめり。風吹ければ

朝またき空の氣色もきよらなるしなどの風に拂ふ八重雲

また夜ふかしと思ひ侍りけるか、かさゝきを聞て

よろこはしくるや／＼と待人をかかさゝき告る明かたの空

風も静まれは叔父利根川を涉り給ふらめと思ひ侍りて

四つの海浪静なる朝なきに渡りこゆらん利根の川舟

かく讀み、浴あみし侍りて

湯あみして内外もすめり面白く夜もほの／＼と明けの玉垣

東の宮を拜し奉りて

宵よりのしなどの風に雲晴て東の宮に朝日かかやく

西は遠く信州淺間の煙りはなくて雪白々とみえ東は近く金山

いつみても替らぬ色や新田山裾より峰に松の青みて

笠懸野にて

降らはふれふるとも何そいとはまし旅の空にも笠かけの原
雨霜の降るとも更におもほへす笠懸の原にさしかゝりぬる

叔父赤城參登の詩四句を歌二首に和らけ侍りて

立出る心も晴て赤城山風も來よとて木葉吹らし

雨雲を起すや高き赤城山神のみたまを仰く民草

赤城神社神拜の時、神木の杉を見て莊周かいひし牛を隠す大木よりも大なるへしとて

牛のみや船をもかくす杉の木の赤城の山に幾代經ぬらん

瀧澤のたきの大なるを

白雲を踏分け來ても赤城山空より高く落る瀧つ瀬

屏風の聯句一句毎に歌よみ侍る

耕田野叟埋春色

春來ては詠る野邊の花をまた耕す時は埋やすらん

汲水山僧計月光

山寺に獨りささひしく住ぬれば筒井の水に時や知るらん

粧容美人双鬢絲

花によそふ姿も今は散り果て頭に白く雪そ積れる

詠花公子一房空

打むれて詠し花も昔にて獨り物思ふ我そ残れる

更深嶺外春猿嘯

谷深みおほろ月夜に呼子鳥峰に答て春そ淋しき

○溪沙頭白鷺眠

いさきよきいさこも更に白鷺のおのか所と數そ眠れる

揮斤

山かつの山になるれはおのがわさとおのをふるひてとる杣木をそ取

凌雲

志し立てのほれは白雲の上には月の影そさやけき

我産泰明神二の宮へ詣んと思ひしか、今日曇り叔父を進むるに術なく止ぬ。遺憾甚し。

詣んと思ふ心を雨雲の掩ふはいかに我をとゝむる

家に歸り夜に及ひ空晴たりければ

歸りては又晴渡る浮雲の今朝を今宵になすよしもかな

碓氷峠にて東の方を望みてよめる

思へとも届かぬ事と知りなから心にかゝる東路の雲

淺間山を見てよめる

寒けさの淺間の山に立登る煙りを分けて積る白雪

木曾八景の内興川の秋月をよめる

浮島の絶間を越て來て見れば爰や興川の月そさへぬる

天明二年十二月二日懷徳堂開講のよし聞けは、一樽に鯛を添へて祝す。座客殆百人、予上段の客

なり。我れ文谷の孝子境野の孝子等を語れば、聞く者堵の如し。宴夜半に及んで未だ畢らす。講釋は論語學而篇第六章入則孝出則弟一章のみ。予志し和歌を詠し侍る

難波津を思ふ心になりて見れば花咲春にいつかへるらん

唐崎の鼻なる茶屋に休ふ。坤に淡路島あり、雨降り來る。風景無双なり。魚を肴として酒を酌してよめる

老ぬとて若に歸へるそなれ松これや舞子の濱といふらん

高砂虎溪の山亭にて月を見てよめる

嘯くや風に浮世の雲晴れて虎ふす谷の月を見るかな

天明三年正月二日暮に及むて江口圖書來る。予も巽斗目麻上下にて江口氏と同じく下立賣 御門を入りて、院參町東坊城勘解由長官殿へ入り、布衣きて 禁裏唐門より入る。杉山氏なるもの案内す。高辻家の家士のむれ居る所にて大禮の初まるを待つ。斯て坊城殿庭上に謁しけるに兼てより知りぬとて、親敷紫震殿前庭上を引廻られ、御節會大禮の式を示されける。月花門の邊りにて、平田若狭守なるものに御節會拜見あるやうに頼みありて、昇殿せらる。内辨は鷹司左府殿、上卿

は大炊御門廣橋滋野井廣幡殿と見えし。仰けは天象明らかに星の位正しく、是れそ 皇統綿々
寶祚長久のしるしと嬉しく、手の前足の踏む處を知らずそ有りける。思はず進み寄りて居りける
に、後ろに多く若公家の立並ひてさゝやく聲のしたりければ、江口先つはとて予か袖を引て出
つ。何そと問へは烏帽子のひほの取れたる時に若公家はら笏を持って公の後をさして笑ひさゝやき
たれば、若し友ふ過るゝ事もありなんと思ひしまゝ出てぬと答へける。陣の座より拜、舞踏立ち
樂迄残る處なく拜見して、萬歳樂をよめる

七重八重袖に包まん九重の雲井をもるゝ萬代の聲

脇坂氏の宅に入る。夜の五つ頃迄待ちて安植と出てゝ北野の天神へ参り、茶店に入て今夜島原へ
行かねは行くに時なし、行とせては急に思ひ出すとて駕籠に乗して島原へ遊ぶ。八つに及むて着
きける。桔梗や染絹十六歳出つ。藝子万代にてそありける。引船予か簪を取りぬ。脇坂氏に再遊
する事勿れと示す。二十八日酒をのみて出つ。町門の外迄送れり。駕籠内にて認めて染絹に歌を
遣りける

なれそめし心の程は一入に花の都の春おしそおもふ

頃日將軍地藏開帳にて、大村氏の進めに寄り山へ登りてにきはひを見る。山へ懸け作りしたる茶

や七十餘軒とそ。下りて三星に入る。出臺に寄りて食して酌みける。老人有りて肴を菓子に見誤
し、三文計り賣りてよとて来る。酌に居りたる女是れはあなた方の肴なれば賣る事はあらずと答
へけるととき、ひなびたる老女にて愚かなる所おかしかりけるの故に、呼び止めて酒肴を興へぬれ
は、其代りにとて懐るより錢を取り出し置んとしたりけるを見て、大村氏金子百疋を興ふ。老女
か所を問へば花園といふ。時によめる

君か代の恵も廣き天か下懸る情の花園の里

嵯峨嵐山に遊ぶ。先臨川寺前(一九)を経て渡月橋(二〇)を右に見なして登る。櫻の花松樹山中に咲交りける多
ふからず、少なからず、山の體峻ならず、また易ならず。桂川兩山の間を流れて深からず、淺か
らず、遂に船を浮へり。客は予と安植を上客として其外多く、瀧有り戸無瀬の瀧と號す。船を出
せり。船より上りて虚空藏堂へ至る。參詣多ふし。十三以下の者皆今日參れるといへる。又渡月
橋の上にて船に乗る。船中酒肴數を盡し、醉に任せてよめる

散らてこそあらめと思ふ櫻花とか嵐の山といふらん
思ひきやけふも都に打連れて春の山邊の花を見んとは

天明三年四月十三日木曾谷櫻桃の花今に咲きぬ。山吹山を經るに山吹の花盛なり。櫻桃の盛りなるを見て

花は春と思ひ來にしを木曾山の谷の奥には今盛りなり

春過て色なき里と思ひしか谷間の花は今を盛りそ

天明三年五月朔日、辛卯ひらく神よし母倉ものたちよしといへる日なり。快晴。早に髪をおさめ行水し、神事に懸る。禮服は淨衣烏帽子沓を懸け、僕に麻上下を着せて沓持を勤めしむ。長叔父(三)も淨衣烏帽子沓を付け、濟みて懷中にたとふ紙中啓と笏板を持ちて神前へ進む。要叔父父子孫十郎板橋辰右衛門大槻七郎右衛門庭上に坐す。先きに神を引き六根中臣三種祓十二度畢て退下し、初献三方に供餅、五寸に蓬柏、亞献御酒すゝに入る。八寸へ鬘斗太麻、生魚はさい、生菜はうど二品直に徹す。一献八寸へ洗ふて五穀を進む。二献高杯赤飯、五寸へ鹽茶。三献八寸へ飯汁膾、盆へ茶香物皆徹し畢て酒をしたみ飯を開らく。祖母公祖姑西ノ村叔母臺叔母は神前の堂上に座せらる。六根中臣三種一度濟みて退下暫くにして御酒神膳徹して庭上に拜載す。時に日中に及へり。赤飯の後予は布衣烏帽子にて、庭上に於て公卿より以下學生より送りたる詩歌和文を告げ奉る。祭祀の時庭上に二行にあらこもを敷き、族人列坐、長叔父は一献毎に堂上に上りて門外執事を呼んで初献より

三献に至る迄門邊へ捧け持たしめ、予取て階下に捧げ、長叔父下渡し神前に進め奉りける。先に執事者に御酒より神膳皆な書して渡し置き、次第を亂らしめず。祭祀畢て族人と盃酒してよめる
千早振神の御國に仰きぬる青人草の茂るはかりは
鳥か鳴東の果を守るとよ伊賀鎮の神のあらん限りは
八百萬神の守りは天地や蝦夷か千島も我國のうち

懷刀銘表に 秋元家臣藤原正秀作 裏に天明五年二月十五日伊賀鎮神孫 銘、守之貞固發之節義 己年八月六日兄正之幼妹おきんとのへ

稚なき心にも能くたらちねの身に耻あらぬ事をこそ思へ

天明二年三月十九日服部氏語りける。神道の物語に脱カ及ひたる時に、ある神學者の人に神書を貸す。始めに示しけるやうは、神書を見は國恩を報ゆるといふ心を以て見されは此書は分らすといひしと申す。神道といふは 天子御味方の連判帳の如とし、神道ならずとも 天子を戴き國恩を報ゆるは知れたる事なりと。服部氏語るに予いひけるは、世衰へ名分を亂るに及ふ故に其説起るなるべし、たと名分大義を亂るの學者世に多ふきを歎息してよめる。

古しへを仰けは高き我國の道の教をかゝるへしとは

上毛國山田郡草木より澤入え入らんとして森のしんくたるを經るに、ちらく月の見え給ふけしきいはんかたなし。欄干橋によりて月を見てよめる。

咀傳へそひ來て尋ぬ澤入の朧に橋の月を見るかな

おほろにも見ゆるや嬉し光りある心の底は月ぞ照らさん

赤紛にて茂右衛門といふものゝ所に休ふ。主し餘り厚き事故に出るとて、門に杉の木道をさしはさみける故に、讀て杉の枝に結び付けて歸りける。

山里の人は厚けれ忘れぬ又も問はまし杉立る門

又半藏所に休ひ、此地草なと生ひ露の深かりければ筆を借りて

尋ね來て見れば露けき杉深み岩にも苔の秋を示して

又月を見てよめる

獨りのみ流れに添ふていさきよく谷間にすめる秋の夜の月

服部資泰か和歌の道にも入、文道の進みたるを祝ひて

文の道絶す心を播磨瀉明石の海の月そ詠めし

谷落葉

錦とも思ふ計りに吹くるはこの頃降れる谷の時雨か

(系集・五三)
我子義介へ興へし文の中に歌よみて

何事も思ひの外と思ひ知れとても居らぬ身れ説カにしならずや

土佐國谷伴見大人によみて送る

いくそはく人を集へて村肝の心を語る日こそをしけれ

(三三)
樺嶋公禮主へ讀て送る

ますらをのみとせ別れし後に逢ふて共に見し夜の月そさやけき

寛政元年十一月二十二日曇る。(三三)前野達出立予送る。合引橋を渡り吳服橋に入り神田橋を出て小川町を経て水道橋を渡り富坂をすぎ大塚を経て庚申塚へ出て板橋に至るに、いまた川田千之助渡邊等着かす、達と又歸りて見るに及んで漸く着けり。茶屋に入りて中食す。達茂雅と予は酌む。遂に戸田の原まで送る。蜜柑を買ふて別盃に准んす。扇子に歌を書す。故郷へ行人を送りて。

赤城山眞白に積る雪なればわか故郷は寒からめやも

別れて後扇子を舉げて影の見ゆる計りはふり歸へりける

前野達、北風の烈しき夜はも丈夫の集(ふ)心は春立る如、返し

丈夫の圓居せる夜は勇魚取海山越て風も來る鴨

土佐の貞婦横田氏の妻よめる歌の神風といへる言の葉をとりてよめる

神風のいせの濱荻筆の海くみてそ思ふ大和歌人

天照太神の詔に豊葦原の中つ國は吾か兒のしらさん地なり云々と有りけるに、恐れみ畏れみ敬み謹みてよめる

神風になひくや廣き天か下民の草木の數ならぬ身も

閏七月二日義貞朝臣の日に當り、國に居らば厚く祭も奉らん物を、かく旅に居りて祭りにもあつからず残念に存參らせ候。此頃昔を思ひてよめる

かゝりける城も珍らし新田山高くそ名をは今に残して

重名主にはいほ參らせて誠をまもりて天地の神の恵みをまたせ給ひと思ふ計に

天地の心は眞ことそこまでも照る日のかけの及はぬはなし

重名主かまことを武き道とこそしれと有りける返し

天地の神のみこゝろ誠にて誠の道を照すとをしれ

讃岐のさる人に讀て寄す

三つの綱一の綱にかゝらんとするを否へる君そ床しき

白旗の翁の杭と戦(ふ)村と書てあるを見て、好める事とて笑ふて歌はとあるによめる

治れる世にも忘れぬ武士かやなみつくろふ戦の里

鎌倉小坪井村金七其弟吉右衛門同宿す。吉右衛門は貧にして妻もろ共に江府へ出けるを、其兄金七止めに來りし所生麥村にて追ひつめ爰に宿り、兄は歸れといふ、弟は江戸へ出て稼き、來年五月迄暇玉はれといふ。吾裁判にて來五月迄江府に稼くこと定る。歌三首を讀み、三人の人に與ふ。

先兄に

立別れ其頃しもに年浪の松によせこん小よろきの磯

弟に

世の中の浮寝はなみになれ初ていと、榮行小よろきの松

其妻に

靡くなよ背山に添へる女郎花よしなき方の風は吹とも

高山朽葉集 卷之一 終

高山朽葉集 卷之二

贈正四位高山正之喪中歌四百四十一首 附長歌一首

寶船のりてあまねき春の夜の夢にも入れと人祈りなん
寶船人の入へきものならて春のこゝろに神や乗らなん
寶船春のかすみの立こめて見へぬはかりの海のとけさ
寶船とりてあまたの世の中をいとふ心に春やかすめる
寶船いらんと思ふ世の中の薄き心に夢もいらしな
寶船貪る人のこゝろには春の夢にも入らしと思ふ

寶船乗る海つらの春めきてのとかによする庭のさゝ浪
寶船よする島ねの春めきてつりする海士も若菜つむらん
寶船ふねのともにも乗りぬれは春の遊ひの初めとなさなん

蓮沼政徳ぬしの五首の歌に答へ侍る

けふ見よとさかりをとものに家櫻君かこゝろの花そかをれる
さゝの葉のそよくにもまた櫻花はなの梢を君そもるらし
春毎に咲櫻木のいつとてもかはらぬ色を花にしめして
數ならぬ我にも見よと櫻花君か心しかをりぬるかな
梅櫻松の梢に菅原や文守る神も君を守らん
泣聲も通らぬほとに雲みちて雪にそ遠き入相の鐘

降雪を仰きてをれは寒空の曇りて聞こゆ入相の鐘
空よりも涙の友とふる雪の涙に聞いていり相のかね
空よりも涙の友とふるゆきのあはれに響くいり相の鐘
雪ませに雨もふれはや涙ども共にそ喪屋に入相の鐘
入相のかねて思はぬ墓原や聞もあはれに積る白雪
入相のかねもあはれに消かへりことしもくれて見ゆる白雪
入相の鐘を聞にも哀れなるいつか消なん墓原の雪
入相のかねをや聞き身をそ思ふ消なんとしのくれの白雪
入相のかねにそ思ふ母木ゝのとしのくれにやふれる白雪
晴かゝる夕への月や鏡山光さへそふ行末の空

見へわたる雁の數さへいくらともよくよくうつる月鏡なる
はれわたる月の鏡にかりかねのふみもや通ふ夜半のおもかけ
かりの來る國も常盤のしかすかにおもかけ見ゆる月の鏡に
影うつす岩井の水は地の鏡天の鏡は月にそ有らん
人にありと思ふ心に立むかふかゝみの山に月を澄ける
待からに鳥の聲のくはくはと耳にはたてし聞そ久しき
足なみのよりくるたひに待わふる人にもあらて待そ過きけり
旅人を南にむかへ見るかうちにきたきたとのみさして行けり
朝よりも待わひぬろゝ袂をもしほれは喪屋に入相の鐘
待わたる人たも今は消かへりよるにも入らは雲路とはなる

此まゝに消なはきえね秋の露冬の霜ともならはなれかし
あめつちの心はまことそこまでも照る日のかけの及はぬはなし
あめつちの神のみこゝろまことにて誠の道をてらすとそしれ
このころは緑の林かれはてゝしなとのかせの吹はらふらん
吹はらふしなとの風に旅人の身にそかゝれる雲霧もなし
雲はらふ風の恵に旅人の道行空の月そてらさん
月讀の神のてらしや古への道行ふりにふみ思ふらん
ふみ見ても今やしるらんいにしへの道の勇みに何か恐れん
降雨もたとへむかたもあら布のころもなみたのたゆる折なく
折々のをやみもあればあるものを雨をなみたに何たとふらん

たとふへきものこそ今は荒野らに捨はてられし我か身なりけれ
我身いかになりぬる袖の藤衣かゝるあはれを誰にかたらん
見る事もあら野のかり屋藤衣かゝるなけきも怪しといふらん
怪しともいはゝいはなんあら布のころも哀れにおきつきのもと
おきつきや月日もしらてけふまでもなみたにくるゝ野へのかなしさ
悲しさは限りもあらぬ海のうへやたへかたなみの秋の夕くれ
夕くれにたへぬ涙の落ちたきつ瀧の流れやはやき月なみ
月なみのたつことやすく流れては西の山ねに傾きにけり
傾きて過る月日を思ふにも戀しきものはむかしなりけり
むかしをは思へは戀したらちねやそのたらちねも在にしものを

在し世を思へとも又歸らぬは知りつゝ指に數ふ年なみ
年なみの過るにつけてうき身にもゆるさぬものは髪えのしらか
髭も又野への草葉とうち枯て露や置けん白くそ見へける
墓原を見るに涙の雨とふるつちやうるほふ春の若草
利根川の流れたえせぬ涙にや春の春雨秋のむらさめ
あはれみの上へにそきたる藤衣涙にぬれてくちやはてなん
たれもしれ身はたらちねのかたみなれは耻をやかくな玉の心
人の世の中に希なる人のありて道をやのこす古へのひと
人々の心の花も風ちらす實のなきはても哀なりけり
信なく涙にくれてよなよなに思ふ友あることをしそ思ふ

神無月庭にふりくる音はいかに時雨やさそふ木の葉なるらん
吹かせにつれて木の葉の降る音は何れ時雨にわく方そなき
風散らす木の葉も今朝はから錦時雨のあめの色や染らん
起出で、見れば木の葉もからにしきけさのしくれに色や染らん
降るまゝに降ると思へはむらしくれ跡かたもなくはる、空哉
降つゝく空と思へは見るかうちに跡なく晴る村時雨かな
しくれかと空を仰けは雲晴れて木の葉の落る音にそ有ける
ぬれつゝそ野邊のかり庵筥をあらみもりくる月のかけそ悲しき
玉とのみ思ふこゝろに興へたきこゝろを今のまゝに用ひよ
今日に逢ふことも涙にあら布のころもぬきてもおきつきのまへ

大原や小野にはあらぬ鳥邊野に雪ふみわけてとふ人もかな
喪屋にありて思へは悲し親のおやの恵あまねき春の空なる
喪屋にすみ心に春を迎へては恵やかくと君そ戀しき
喪屋にをりたく柴木にも覺ほゆるこの世の中の春そ寒けき
喪屋に居る三年の思ひ寒からず春やもふけの君のつとめも
喪屋の筥にぬる夜の夢も春なれと延ひぬ心に悲しくそ見る
喪屋春も春は昔しの春なれと春や心に堪る寒けさ
喪屋の筥しきねにも君はあめの恵み土の枕に春や立らん
喪屋のつとめ春や心の寒けさに身の毛も立ちて恥かしそ思ふ
喪屋悲し悲しきかなや春風の恵みて思ふ身にも寒けれ

草も木も春立かへるあしたにはそこともしらて恵みてそある、
草も木も恵みの春になりぬれは雨待かほに見ゆるなりけり
草も木も春の色とやあふき見れは戴くそらの氣色なりけり
草も木も空も同じく青くなる春のけしきはのとかなりけり
草も木も同じ色にそあをかなむ春の空ともいわふゆく末
草も木も春立けふの氣色には藤の衣もかすみそむらん
草も木も同じく仰く春の空我もつくろふ藤の衣手
草も木も色をふくみて見ゆれともあはれ朽たる藤の衣手
草も木も思へはやさし春になれは我をなくさむけしきなりけり
草も木もあまねき春の恵みありと喪屋の笛屋に見るそ悲しき

長閑にも霞の衣旅にきて春立そむる野への若草
詠めつゝ河邊の柳引糸に身をもとはれてやすらひにけり
やすらふて見れは山もと霞たつ旅の衣にかさねきなまし
けふこゆる山路の花も咲そめて花にうつれる香そ残りける
かたみとを見つる心に花の香をとめてや旅の思ひ出にせん
身に寒き春の初の風なれは雪けの空やあやふまれぬる
身に寒く吹風なれははるはると春の詠はならしとそおもふ
身に寒くおもほゆるまでに世の中の人^の心や春ならぬかも
身に寒く思ふ心も心なれは心に問へよ春のこゝろを
身に寒く思はゝ人も思ふへし是を思へは春の心に

身に寒く思ふ心も心にて心に問はゝはるもしるらん
身に寒く春や衣を重ねきて人を思はぬ人そ悲しき
身に寒く思ふ心の春ならて冬も淋しき人の世の中
身に寒く吹風しみぬ世の中の人の心の春ならねばや
身に寒く思ふ此世もよしさらは蓬の鳥の春や見なまし
立のほる霞の衣寒風のふきて柳の糸やみたるる
立かへり見れはかきねに梅の花時しりかほにゑみてかをれる
立出てゝ見るに若草野へを青み生そふ春やのとけかりけり
立そむる霞は春の衣にて柳のいとぬふかとそ見ゆ
立波のよするみきはも春來れはのとかに思ふ霞なりけり

立そむる旅の衣手寒からぬ都をさしてのほるのとけさ
立歸る道も春邊に鳥がなくあつまに及ふ恵みあまねき
立寄れは人もかをりにさそはれて梅の垣根を尋ねてそ見る
立別れ雪のやまやま詠むれは春の衣とかすみ柵引く
立春のけしきを見るに草も木もあまねき恵み含む計そ
とふ人もあらしに我は厭はるゝうき世の中のおとにおもひて
人もまた我をそ厭ふものと思ひものゝわけある世をもしらすに
喪屋にをる心もしらて世の中のまことの道を問ふ人もなし
哀れ問ふ人もあらしの喪屋の中夢むすはれぬおとのみそする
おとにきく目には見えねと吹風に鬼の宿も吹散すらし

吹おこすしなどの風の息へよしたけくや散す白浪の音
喪屋に居る哀もしらぬ世の中に松珍らしく春そ來にける
かけまくもあやにかしこき木の丸の我かおほきみの惠をそ思ふ
風たにも松におととして行なかに及ひもあらぬ人の世の中
おとつるゝ人もあらしにけふ明日と松にかひなきことをしそおもふ
夢とのみなしはてゝ住世すよの中に覺るまもなく又夢そ見る
覺て見るに憂き悲しきは消果てかはらぬものは誠なりけり
夢見ても心にかゝる雲もなくはれたる空の月もあらはや
覺て思ふ心に誠あらぬ世の中にまれなる人をしそおもふ
覺て後に思へは常に思ふ事の夢には見ゆるものにそ有ける

夢見ても思ふ誠のありつれば浮世の今の人そものうき
覺てなほ思へはいとゝあはれなるこの世の中のなつかしきかな
夢となしくらましやれる道もあれと誠ありてはたとられもせず
から衣春吹風の寒けきに雪の山根をこえて來ぬらん
越えへ來ぬる雪の山路の旅衣寒く吹らんはつ春の風
はつ春の風にもまれてなよ竹のすなほに生ふる御代そかしこき
かしこくも御代そさかえんときはなる松にそ思ふ藤衣きて
藤衣春きて松にかけまくもかしこき御代といのる計そ
祈る心神やしるらん松かけて春にそおもふ藤の衣手
衣手のぬるゝ計に春きてもおもふむかしに君そ戀しき

君戀し春やむかしのよもすから語りぬる喪屋夢となりけり
夢となるむかしにぬるゝ藤衣春のいは井に出る涙よ
出る涙春のはしめの松にもやかゝる哀の藤衣きて
春くれと風も寒けく足引の山白たへに雪そつもれる
つもる雪ふる山里の春風に杉の戸さしてつま木たくらん
つま木こるしつも春邊の静にて垣根の梅を尋てそ見る
尋ぬれは引や出なん青柳のいとも寒けき河の邊のかせ
あやふくも春の山邊の薄氷わたりて過くる身こそ寒けき
身も春になりぬる夢に霞たつ山邊をさして入らんとそ思ふ
見るかうちに春來にけりと足引の山も霞て人につくらん

人々の心も春ののとけさをまつに千年のよはひのふらん
のふるなるよはひをかめの萬代とかねてもたのむ春のはしめに
民草をあをひとくさといふからにその大君をすへら木のみこ
民草に恵みの露をかけまくもかしこき君と仰く萬代
しら浪のよするなきさに春くれはあはれなみたの玉拾ふらめ
天地の神の恵みの残りなくあまねく照らす外つ國までに
春の色見るに心のなくさまでふりくるものは髭の雪かも
藤衣涙にくれて春きつゝ喪屋の哀れにしくものそなき
春きてはかすむ心や藤衣あはれに見ゆる野邊の若草
哀とも思ふ心は人なれと飛ふ鳥野邊にかすみこめつる

春風の吹と心の寒けさに恵みもしらぬ人の世の中
外かはまえそ白浪のすゑまでも子を思ふゆへ親思ふとよ
照らす日の本の心や神なからをしへをまもれみとせのつとめ
たくへてもいはん方なく雨とふる涙や土の枕にそぬる
たくへにも思ふ方なく涙にてたとへとりとり睡る計そ
行末を長く守れよ民のまた神代の道はすくに其まゝ
風にちる雲間の空を詠むれば月はかはらてすみ渡りぬる
風に散る浮世の雲の晴間よりすめる月をはいつ詠むらん
海士の子の世渡るわさやいとまなみ靜かに春は若菜つむらん
年のおをひく手あまたの春霞こめてやひとり喪屋にすみぬる

哀れなる喪屋におりたくしはくも涙の落てきゆるはかりに
かはらをも寶とおもふ世の中のわれなん事の危かりけり
身をたもつ心はすくにいにしへの人と神とに叶ふ敬み
言の葉もなきてそ明の春なれば哀れに見ゆる野邊の若草
喪屋悲し悲しく思ふ筈なれば春吹風もなみたにそきく
夢むすひとけぬ思ひにしつみては身のうき程の涙なりけり
淵となりて沈みやはてん泪川盡ぬなこりの流れ絶えせし
悲しさはたとへん方も泪川なかれ流れの海とならん
名を流す事も中々泪川況やはてん身にこそあるらめ
廣き世を思はぬからに泪川沈みはてゝの名社まゝなれ

いさら井の水波わけて世の事の人の心もかくとおもほゆ
しらなみにたつきもよその國の外鬼の鳥根の人の世の事
立春にたつや衣を立田山立いて見れは霞たな引
むすふての水も氷りて朝な／＼思ふ心の寒くもあるかな
年月を越へて久しく鳥さへも其親鳥をなほ思ふとそ
はかなくも落たる後に鳥はまた何をしるしに思ひ出らん
人はまた萬にすくれたりといふなにおふことのならぬものは
鳥たにもその親鳥を思ふてふおもはぬものは草木ならまし
草も木も我大君の國を思ふおもはぬものは何にたとへん
聲悲し雁の別を告るさへ聞けは涙にくるゝ我身そ

たつ雁の名残をしくも限りあれはまた來る秋をちきる計そ
春の空あふく心に恵みをも厚くや思ひ祭をそする
あらんかきり祭る心の誠をは神もや照らせこの日の本に
神代より祭る出雲の御社に今もかはらすつとひとつひて
神々のつとふ出雲のいつも／＼かはらぬためし代々に祭れる
嵐吹おとにそいたくをしまるゝ残りし梅の花や散らん
きえあへぬ雪やまたらにちる花のかをりをのこせ春の山かせ
花はちりて飛ひかひ來ぬる鶯の梢に名残をしみてそなく
散る花を雪かと思ひふみわけて見れはかをりの裾にまとへる
雪か花か見わかぬからにから錦しくやとてこそ垣根にはよる

我のみそ知る人なしの花なれやみのなるときにあふよしもかな
里なれて鳴や鶯我はひとり深山の奥に住みて居らはや
人の世のうき事しれる神を思ひわれも山路に入らぬへらなる
月にならひすみや渡らむ谷川の流れにみそきせる心ちにて
ふみわけて入ぬる山の奥までも照る日の本のみかけなるらむ
里なるに身に吹風の寒ければのかれて入らん山かけの庵
世のうきを厭ふ心に住すてゝのかれ入るさの山の端の月
厭ふてふことはくさをふみわけて山に入りなん名こそ有けれ
すてられし身のおき所なきまゝに谷の流れに月とすみぬる
あけ渡る月にあくかれ出る日のかけも長閑に思ふ山かけ

人々の言葉の春や花咲て千々の草木の大和からうた
ゆたかなる世に逢坂の關の戸もさゝて行かふ花の香もする
宿からは梅の木の下よなくの夢にも花のかをれとそおもふ
住佗ぬとふ人もなき庵りをもしはくかせのおとつれて行
長閑なる春山近く家ゐしてはやくもきゝつ鶯の聲
あしからはよしをやいかに白浪の立田の川に名をや流さん
名をやたつ立田の川におやおやおやともわかぬ身をやしら浪
世の中の人の心の黒髪のみたれ思はぬことそ悲しき
とけといはゝ浮世の人のあやまちて髪のみたれのはしやおこさん
くやしともおもふ心の花咲て身に誠ある言の葉そよき

御代かしこ賢き人も埋れぬ時も春なれば花や咲かなむ
家路へはかへる心もあらぬのころもきるそ悲しき
玉つゝむ心のそらのくもりなく君をおもふもあはれ身の上
至りいたる心の程もかきりなき恵みは何にたとふべきやは
至りいたる恵みの程は春の雨あまねく生ふる野邊の若草
春霞わけ行山の旅衣昨日に今日はあつくきぬらん
草枕霞のころも春にきてよさむを厭ふ旅の朝立
武藏野の堀邊の井はこゝそとやむかしの跡を尋てそくむ
頼みある心の人の参り來て神に詣てのみちや開らける
けふこそはいつよりもなほ人おほき誠や神と祈ることゝろに

神や守れ守れや神と守らはや守る心に参るもろ人
てらす日の本の神々三千あまり道をは守ることゝこそ思へ
かすくにおもひつゝけてぬる夢の覺るまくらや涙なりけり
袖の露に見ればや空もおほろにてなみたに曇る春のよの月

いつれの僧にやありけん、しつゝ念珠取りいて、御墓へ向ひつるか、あら布衣に髮髭のおひ亂
れたる蓬の如くなるに、夕日のかゝやきたるを見、走る事猿のことくにて逃去りけるをよめる

うしと思へは羊のあゆみおつゝもほふれしものゝなにかきさらん
あき風を厭し事も昔にてなにかはあつく身をや思はむ
袖ぬれて春にも晴れぬ雲ありて涙は雨と常にふりけり
我身いかになりぬる袖の泪川流れにひたす物にそあるらん
歸る雁かへるつはめすら知るものをしらぬは時の人の恥かし

告げ渡る折知り顔やつはくらめめくる月日の駒にひかれて
人恥るちきりかはらぬつはくらめけにや常盤の國のならはし
あらまほし人にうつして鳥か鳴くあつまのはての常陸筑葉設も
春霞かすむ心に仰きても及はぬ君かめくみなりけり
野邊を霞見るに心もなくさまて春にもはれぬ思ひなりけり
なき侘る梅の梢のうくひすは花の名残のをしくやあるらん
かなしみの中につもれる年月や花なき里の心ちなりけり
さらてたに身のいたつきにいる人の霞む心の春いかにせん
思ひいつる昔の春は花なるに今は心のかすむはかりそ
かなしみに花咲春もおもほへす霞こめたる野へにおりぬる

ともに居る喪屋の筥屋の春秋の言の葉ことに露そこほるゝ
あやまちて玉かと見れば草の露恵みに落るなみたなりけり
墓原や哀れに空も打曇り心もかすむはるの夕くれ
草におく露か涙か朝なく覺てくやしき夜なくの夢
思ひやるうきに流るゝ雨水に利根の河原も見えぬ世の中
すみわたる心のうへを雁かねも南のかたに告げて行らん
いをやすくねられぬ音を身にしみていたく思へと嵐吹なり
かけ淋しともしく見ゆる燈火を友となしつゝ夜をあかしぬる
吹入るゝ音すさましき嵐こそ春のゆるみといましめて行
厭ふへきものにそあらずしたしみにかはりて入ぬる喪屋の風にも

いかなれは今夜はかくそ枝を折り吹やしなどのあらましの風
風さそふ聲にそ雲も飛びへて月さへ渡る空やすさまし
春といへはのふる心やさしかすかに花もおもはぬ身にはあれとも
身の外に頼むべきものもあらぬ世の其後思ふ後も希なる
月やみつみつれはかくる世の中の霜とそ思ふさえ渡るをも
頼みなき今世の中のかなしきは其後さへも先をおもはぬ
まことなく涙に沈みうき／＼やうき世の人の薄きましはり
山にすむわれなるからにさとりなき浮世の人は道を知るらん
花もちると聞は哀れにおもほゆるとてもなかむる身にしならねと
里なれてなくや鶯春に逢ふて宿はと問は、花と答へよ

花もまたちらは散らなんちらぬとてとても詠むる身にしあらねは
哀れなり手向の花も花なれと花に涙のおつる計りに
頼みある人の心の誠ならば君かまことそ守らんとすらむ
咲匂ふなくさむ折と見るからに袖にそかゝるはなの雫や
梢をもしらぬ身なから言の葉の花にそ思ふ在し昔を
靈の空霞と消し昔とや詠められつるけふの夕くれ
春の花秋の月をやうつすらん今にもてれる敷島の道
たけたまのたまの分れの身にもかくその子の身にはさそやおもはん

ことわざにけふのいは井餅を川ひたり餅と名付けて、水難遁るゝ爲といひならはしに従ひ玉ひつ
る事を思ふてけふは川に水波事をせて井に汲て用ひ侍る

君か事守りて井にそ汲にける水にならしとおもふ心に

産れさせ玉ひし所の井の水にて茶を煮奉りてよめる

世もかはり時も移りて寒くとももとの心に汲てすゝむる
ひとしきりふりくる雨の音を聞いていそくなれぬ野路の旅かな
春は花とおもふ間もなくうつろひて一夜の風に散るそ侘しき
花ちりて侘しとそ思ふおもひきやふみわけてとふ人もあらんとは
かへり見る三年の春になりぬれは藤の衣もつゝれなりけり
花めてゝ春をやすこすけふまでに残れて歸るかりの一つら
頃日は散らんとすらん櫻はな見はてゝ地に歸るかりかね
うらゝかに春や渡らん雁の行越路の花は後れて咲かむ

見ぬわれもあはれと思ふ雁かねの歸る羽風に花そちるらん
ちる花に歸る雁かね後れては獨あはれにおきつきの前
春といへとはれぬ思ひにしひつゝ涙に曇る空も悲しき
空さへも涙に見ゆる夜もすから哀れさいかにおきつきの前
おきふしにつけても思ふなくくも在しむかしの朝な夕なを
朝みせしわれなりなからいと安くあらぬ計におきつきの前
哀れにも春をそしりておきつきの上に生ぬる草も花さく
草のはなを^露涙や^露おきつきの盡ぬ名残に春も悲しき
心をそ盡せやつくせ墓ことに悔とも後に歸るへきやは
きのふまちけふ待人の今やくくはくく鳥梢にそなく

稍には告る鳥やまつ人のくるや／＼の聲に聞へて
 來るやくると聞ゆる時は鳥をもしたしきものに思ひてそ見る
 思ふとち語り置はややた鳥使となりて來るよしもかな
 ぬしもなくゆかりもなくはいかならん今は鳥もあはれをやなく
 あはれさもかくやとおもふ十六夜の月の夜鳥聞そわつらふ
 聞うちにも鳴て哀れにもうちとふ程に思ひきやす
 とふほとに思ひ鳥の聲ともに友よふ我は天に仰きて
 仰ても伏しても思ふ友もかな使にえらふやた鳥をは
 鳥にも親の恵を歸すとや返しもならぬ身こそ恥かし
 世間よのなかを痛むに人も荒野良の駒にたくへて見るも恐ろし

教言毛我身乃長之及羽波つね秋奈良根共厭婦聲鴨
 あはれ身の上にそきたる藤衣涙にぬれてくちやすつらん
 くちはつる身はあたしのゝ露なるをはかなきものとたれも知らずや
 玉の心あれとみかゝてひかりなき石とや見ゆる人の世の中

みな月末の長歌

一年をめぐる月日の小車や早くも夏の
 末つかた秋のはしめになりにける露も涙も
 野邊におき空もいためる折なれや草葉の色も
 うつろひていとゝ哀れに覺ほゆる喪屋の筥屋の
 つとめもや三とせも限ることなればけふの此日も

をしまるれ 君か恵みは 限りなくたとふべきものも
あら布の 衣になりて 居る計り 報ゆる事は
中く に 及ひもならの 都と や むかしの道を
ふむはかりなり

古への教や奈良の都までも三年のつとめありとこそきけ
吹過る風すゝしくも出てゝ見れば空おそろしき夕立の空
思ふまゝにならて居らばや藤衣かゝるうき世は何とかもいふ
なにといふとまれかくまれ墨染の衣になりて居る身なればそ
身はいつこ喪屋の筥屋に風さへて悲しきからにすむ月を見る
すむ月のかけ淋しくも墓原の木立をもりていともかしこき

かしこくもかたしけなくも神の榊しろゑのかけやおきつきの前
夢のうちには夢ともしらて夢覺て夢と思へと夢も戀しき
是も夢の夢にはあらぬか夢か又まことか夢か夢かまことか
夢見ても夢とは棄し夢さめて夢をそ寫し夢のうたよむ
夢ならぬ事をも夢そ夢の世と夢になせはや夢になるもの
夢も又喪屋に夢見る夢なれば夢も哀れの夢にそありける
あはれをもしらぬ浮世にうかれても子をおもふ道にかへる人々
一とすちに思ふ誠を子もしりて親につかへよ世の中の人
照らすとよ思ひにしつむ藤衣重き心にいのらぬとても
語りても人も知るらん古へに四つの恐れもありのまにく

人のこゝろありのまにくく玉手箱あけてむなしく悔しかりけり
いかなれは人のくちにはかくもまたありのまにくく我は知られし
ありのまにくくくくてらす月かけのくまなき空を見るも恥かし
月かけをつくくく見れはありのまにくく思ふむかしなりけり
語らても人の並居のしをと思ひ問はれあかしのありのまにくく
おきつきの前にかしこむ鈴虫の聲もすゝしき秋の夕くれ
すみわたる空も心もひとつなる誠の道を月やもるらん
春夏の過もしらていつの間に野邊は露おく秋そ悲しき
悲しさのあまりに空を詠むれはいとゝ淋しき秋の夕くれ
きれかゝる哀れ涙や藤衣くちはてぬへき身をはをします

藤衣いとも哀れはかゝる身に落るなみたのたまやつらぬく
夕くれは哀れとおもへおきつきやおとも涙の草の葉のつゆ
夕くれの秋の哀のことさらに草葉のつゆとおきつきの前
夕くれの鐘も哀れに響くなる聲になみたやおきつきの前
驚きて目覺て見るに墨そめのころもたかはぬ夢かあらぬか
としなみのよせていつかは年積りかしの雪となるそ悲しき
ときならぬ雪かと思れは秋の野の草葉の露にならぬ露かも
野邊に居れば草葉とともに我髭も秋にはもれすら枯にけり
祖母君の心よけなるを夢に見覺てよめる
君見えてかはらぬ常と嬉しきも覺て悲しき夢となりけり

夢覺めて聞に悲しき野邊の虫の音鳴聲もよはる夜そ更にける
秋よりも秋にめぐりていつの間にはや一とせになりける哉
かなしくもすくれはすくるわれは野邊の露と涙と共にくらしつ
いつの間に月日の駒の足はやく行衛もしらぬ野邊の悲しさ
悲しさの袖の涙にくれて行月日の駒のはやき足なみ
あはれとも思ひとりてよ思ふとち行道思ふものと思は
賤のめかねふりもやらてさめぬらん月影寒く衣うつなり
いろ鳥の聲も哀れに墓原をかなたこなたと鳴わたりける
立出て、何をかなさんもる人もあら布ころも涙にそ居る
おきつきや盡ぬ名残に年月の過るもしらてなみたにそくる

定めなきものにそ有ける夜の間にもいかに成行我身なるらん
おきつきや月の夜すから獨居れはいと、昔を思ひいてけり
渡りてもわたりかたなみ飛鳥川かはる淵瀬の世をいかにせん
世の中はとにもかくにも飛鳥川かはるは人のこゝろならまし
降雨のしはし小止もなくむしの聲哀れなるおきつきの前
たとふへきものも涙にふる雨のもりくる袖そあはれなりける
藤衣かへても麻のさ衣になみたの雨の降らぬ日そなき
藤衣ぬきすてしよりけふまでもなみたの雨のかはく間もなき
墨染の衣の袖のかはかぬにつゆけき秋の又めぐりきぬ
墨そめの衣三とせの秋なれはこれをかきりとぬきそかへぬる

あら布のころも哀や限あれば露けき野邊にぬきそすてぬる
秋かせのふくにつけても朝な夕ないたみし袖に涙こぼるゝ
秋の野の草の葉ことに置露のなみたやむしの聲そ悲しき
きりくす草の庵になくときは涙そつゆとそてにこぼるゝ
終夜よるすがらねふりもやらすきりくすなく音にいとゝ袖はぬれけり
秋の日も涙にくれて夜もすからむしのなく音にねふられもせず
なにとなくむしの聲くあはれさに涙にくるゝあきの夜なく
哀れとそおもひの外に秋たけて霜になり行鈴虫の聲
雨雲の上をやかよふ雁かねのうちつれつゝも聲きこゆなる
降雨をつはさにうけて行かりの聲も寒けき秋の夜半かな

小やみなく涙の雨のふりつもる君か心のうちやいかなる
うきといへはそのうき事はありといへと世の中にすむうき身ならずや
けふの日もくれぬと思へは何となく虫の聲さへ淋しかりけり
淋しけれ草葉もむしの聲ことにかれ行野邊の秋の夕くれ
夕くれに降くる雨のいとゝゝ喪屋の管屋にそてはぬれにけり
さらぬたにぬれにそぬれて喪屋の中にわひしき音や雨の夕くれ
何となく涙にくるゝ喪屋の中にもりくる雨に袖はぬれけり
あきかせをおのか友とや思ふらんこゑうちつれて歸るかりかね
打ませにつくくおもひ入相の鐘はむかしにかはらさりけり
古枯*の風*に木の葉のちるときはおもひなき身も悲しかるらん

降くると思へははれつ神無月しくれはよその里にそあるらん
霜かれの野邊のかり庵に我そすむ月も氷りて出るなりけり
願ふ事のおしきはなくて道ならば叶はぬものやあらしとおもへ
哀れにも音するものは夜の雨とふ人なしの喪屋の軒端に
藤衣うすき心の世の中に厚くやふれる雨のなみたの
藤衣うすくや冬の世の中にふるそ悲しき雨も涙も
世の中のうすきはいかに藤衣空も涙の雨や降らん
世の中の人はうすけれ藤衣きもならぬ程に雨にぬれけり
藤衣寒くはあらて降あめにつくくいたむ薄きよの中
降雨も涙におもふ藤衣うすくもきぬはいかに世の中

藤衣ふとき心に降るあめに通らぬ程の人の世の中
燈火を見るに夜なく我身にもやみちいかにと思ひ知らるゝ
さゝくるもさゝくましきも心にて手向の道をしらぬ墓たむけなき
墓なさの心は我も世の中にあらぬ計りの人と見るまで
墓なさの心にもまた墓なさのなけきもしらて何かなるへき
何とかや野原に生ふる名なし草悪しき心のものはありける
ものゝあはれ知らぬは草木草木ならば恵をうけてあしからましを
よしあしの名はありなからくさくこのことはしけきあな憂世の中
露ちりもたまらぬ程に上下のこもくとりてあなう世の中
上君を敬ふ道を忘れては下民亂るあなう世の中

忘れてはよこしまに入りて道しなきいはらかや原あなう世の中
 行野路の緑の林吹ちらすしなどの神のいきやかくらん
 神の恵みうくる心やかしこくもまさしく夢に三のいか栗
 富士ならて富士とは見えし降積める雪白たへに越の山く
 やとりても土の枕や苦をあらみ夜寒のかせにいやはねらるゝ
 世の中は春をそ松に千代かけていはふやよそに見る哀れさよ
 昔よりかはらぬ年を長き夜の夢うつゝともおもふ計りに
 かたしとは思へと誰れも白玉のみかきもならぬことそかなしき
 紫のさかゆくよはのきぬくも用ゆる人のあればなりけり
 紫のさかゆくよはの夢覺て明の玉垣見まほしそ思ふ

紫のよはのやみとやしらぬひのつくしのはてもかきりなけれは

子供等か墓参りの歸りに喪中喰飲の器物持たしめて遣りぬるとき、常には子供等をいはる玉ふ御心にや、墓のあたりへも近寄らしめたまはさりし事を思ひ出てよめる

常にやゝいまれし事とおもほへてこれにも落る涙なりけり

我か子義介孝經を讀む事を書て玉はれといへるに、よみて與へ侍る

わするなよ親に事ふるその道の教にのこす古のふみ

又

子を思へは子も又思ふと思ひきやおや思ふ事のかくもおもはんとは

麻頭
せとう歌

君を忘れたるにはあらす我もとや斯やあらなんおもほへて見
 ゆるも今は昔なりけり

賢くも賢かれとそたらちねやそのたらちねも我を思はし
忘れてもふみよすきに荒をたをかへすくもいにしへのみち
さやけさの有明の月に影見へていと戀しきいにしへの人
月影の如くなりける人なれば照らすやなかき世々の末々
ひかりとふ君か御代とそ仰きてはさやけき月にいのる民草
仰くなる神代のまゝを其まゝのかはらぬそらや千代萬代と

去年の冬より無言行閉戸日を重ねしに、早春軒の梅開らくを見て、餘りに感のまゝ反古の裏へ書
付ける

此春は別てや花のおしまるゝ物いはぬ身の友と思へは

四月朔日正之へ遣はす文のおくに、劍持正業、詣ふて來し人に答の今日よりそ初むと聞はうれし
かりけるとなん讀て送られしとそ

源重之、東路にこゝをうるまといふことは行かふ人のあればなりけり、とよめるに付き、國を思
ふて

古は行かふ人もありといふ其東路の人そ戀しき

正之か許へよみて送りける劍持正業、風さゆるころもきさらき朝夕に御墓所はまた氷るらんとあ
りけるかへし

氷れとも春の光りのしかすかにとくる計りに見ゆる長閑けさ

正月日脱ガ五叔父正業の病を問て讀みて送りける

春の日の光りと共に神の恵みうけてそいゆることとこそしれ
同じき日に病の養にとて白銀八片をおくる、其包紙に

是も又神の恵と思ひしれたのみのうちにいづるなりけり

二月三日雪降りけるに正之に讀て送りける。雨雪の降るに付ても思ひやる喪屋の苦屋の朝な夕な
を、諸共に涙にしほる藤衣ぬきてもいまた袖はぬれつゝ、正業とありける返し

雨雪も寒くはあらず恵ありてかさねし苦も厚き心に
諸共に出る涙やおもほゆるこの身の限りいかて絶せん

親を思ふ誠は天津神の御心にて、萬の行是よりなりぬ

この心推はや満ん天か下かたみに残す言の葉としれ

丁未大晦日によめる

行年の歸らぬ歎ふち衣涙にくるゝおきつきの前

高山朽葉集卷之二 終

高山朽葉集 卷之三

贈正四位高山正之歌百二十八首

寛政二年五月二十五日湯島の天神を拜し、途に於て房總奥羽より松前蝦夷の遊行を思ひ立故郷へ
蝦夷遊行を告げ、叔父劍持正業へ参らする歌

世の中はいかなる雲や覆ふらん神の照しも及はさりけり

(三四)
又家姑へ

なさけなき人の心は雲なれや誠の月を覆ふなりけり

又義介へ

朝起て文を讀ては歌を讀空讀をして手習をせよ

又せいへ、さとへ、りよへ

三人りともに朝な夕なに歌を讀み手習も又忘れてそあれ

又さきへ

朝な夕なよくも慎めつゝしめは賤きものも貴くそありける

又蝦夷へ渡るとて残し侍る

たらちねの親こそ思ひ雲井より蝦夷か千鳥も大和撫子

熊本猪口氏に讀て與ふ

不知火の筑紫の人にけふ逢て別れて蝦夷か千鳥をも見ん

蝦夷へ渡らんとして洲の崎の社へ参りて

あはの寄てあはとやいはん洲の崎のさきくや有らんゑそ白浪も

小船木といひる所にて酒を酌みて酔のまにゝ讀る

道の邊に休ふかけも無りけりしはしたゝすむ刀根の川水

寛政二年六月二十九日謹みて鹿島の社へ参詣す。神皇后宮の御詠なりとて齋ひする所々の神達も

鹿島立せん昔忘るなと語りける。予聞てよめる

古を忘れぬ神の誓にそ鹿島立する蝦夷か千鳥へ

丸山壽明詩を寄す。結句に思無窮の句あり。予よめる

きはみなくめくる月日も白川の關越へ來れは秋風そふく

高館主水か館の跡に窓の梅とて古木あり。實植二株實成る。實も植るに本より二本生るを奇とす。

歌讀て残し侍る

武士の跡問ひ來れは古の香に匂ひける窓の梅かえ

大沼南北二丁餘浮島奇と稱すへし。沼の内を游泳せり。波騰松とて大松有り。浮島に芳つゝじか

きつはた生ひたり。沼の邊りを徘徊して讀る

四つの海浪も靜に浮島を詠めて過る今日そ樂しき

佐原英信か語には、湯殿權現を湯鹽彦神社とし、月山權現を月讀命とし、羽黒權現を稻倉魂の神とす。大藏坊か語には、湯殿を大山祇命とし、羽黒を稻倉魂命と書なるへしといふ。今夕方、東の方葉山の上に、御來光とて道者共念佛を唱ふ。予も出て、見るに、奇怪に見へぬ。予時によめる

佛そと思ふ心の愚かさよ夕日の影のうつるなりけり

西行の歌を思ひてよめる

岩かねを我踏越て象潟やまことおしまも及はさりけり

望の夜浪に月のうつれるを見て

象潟や名高く澄る秋の夜月遊らん浪遊ふらん

寛政二年八月二十九日青森の宿りを立つ。南部産なりとて哀れなる笠一かひの旅の空文山と名乗ける。予時によめる

哀れとは何をか云はん行旅の夷か千鳥も踏越る身に

歐羅巴の地方に魯齊亞と申所に在て、此方の室町の末に當りて右の地に英主出來此方の永正十年に帝位につき、次第に萬里の地方を蠶食し、寶永元祿の頃迄に三四主を歴候て當時にいたり、中國の西北方塞外の地悉く其有に成り、清朝北京とも使幣を通し候事の由、中國の書には曾て見え申候へ共、成程大清會典の圖にて見候得は、塞外の西北方悉く蠻名の地になり申候は此故と被存候。彼の白石の被申候魯齊亞は西韃靼にて、夥しきものに成候由記され候は此事と聞へ候。元の末と被申候は傳聞の誤とみえ候。右の魯齊亞本國は紅夷の隣近地と聞へ候。紅夷支那一遍の地續と申され候は、それてきこへ申候。扱右の中國塞外の西北方と此方蝦夷の地相向ひ候事に候由其間に數百の島嶼相接續し一々名も有之申候。蝦夷の地近きは是を松前へ羈縻して在しと申候。安永の末年迄に右島嶼とも悉く魯齊亞へ取附城壘を構へ、牧守を置候て曾て松前より手さし成り不申候事の由、残り申候所は、蝦夷より三百里計り隔候所の由、是も最早彼の屬と相成候由、此方へも交幣を通し申度由申候も、彼の國漂流の日本人數百人居候所、殊の外能接待にて返し不申由承り申候。扱々始終北邊の患にか相成事御聞被成候由。先達て田沼松平殿の諸人在役の者蝦夷へ人を遣し候事有之、右の事共迄と有りける
手翰の奥に

ゑそ千鳥ろしやをかけて行旅も隣の國と思はさりけり

毎年八九月頃は他邦より入込みたる者を改め送り歸へす、且去年の騒ぎ以來は人の改め甚しくなり船頭の難儀になれば、克々聞き届けてならては渡海成り難し、公の渡らるゝにも船頭の受け込み六つヶ敷かるへし、渡海し其尋る所の當所の人も家中にても町にても大底にては請込み参らすまし、此六つヶ敷か故構はぬか勤めの如く存す、しかし正二月より三四月迄は稼きの者も多く入込、人改めも今程には非ず、船も多し、早や遅ければ船待し給ふてもいつ船有るへしとも計られず、十日二十日も待給はゝ有る事も候はめとも、早や寒氣甚敷却て御身の爲に成らず、來春改めて來り給ふ事宜しかるへし、何れ渡海は來春に延へ給ふ事よろし、寒氣中々堪へ難き事なりと、主じ善四郎異見を述べぬ。船もあらねは歸へるに定め侍る。遺憾甚多し。津輕の崎より歸るとてよめる

渡るへき潮路有りやと詠むれば荒磯浪の外か濱風

宿りに寝たりけるに鹿の鳴を聞て

降りしめる雨さへいとゝ淋しきに枕に通ふ棹鹿の聲

(三五)野田を過て又雨降りける。今津に休ふ。杉村を経て二つ屋に至りよめる

雨に行旅には何も詠むへきもの荒磯の浪そ烈しき

(三六)蟹田驛宿りの主し久三郎傳二郎友藏なと鯛の吸物にて酌して語る時によめる

圓居しつ酌みつ語れば旅のうさも余所にそ拂ふ外か濱風

蟹田宿三口太左衛門か乞ふにより、志に感じ讀て遣はしける

敷島の道こそ絶ね賤の男か恵を乞ふることのかしこさ

蟹田宿を立つ。今日は波荒れて右岩滑かにして壁の如くなる所打寄る波間を見て行く。其間二三丁なりけるに讀る

世を経なはかくこそ思へ外か濱荒浪寄る中の通路

夕風寒く成りぬれば青森にて綿を入れん事を思ふてよめる

秋たちて寒くそなりぬ旅衣わた重ねてや明日はきなまし

三口氏か案内にて往來屋太左衛門所に宿す。先きに宿りし家なり。袷に綿を入るゝに付て太左衛

門を頼みけるに、仕立るものも非す杯言るに付てよみて興ふ

旅衣薄くそ有りぬ重ねなん厚き心になれや世の中

蟹田宿に宿りて夢のうちに帝都へ上りたるを見たりける

九重の都の空も見えつれば八重の雲路も分て登らん

巽の方かうたの岳昨日雪降りて峰白しと見ゆ。岩木山も遠く見ゆる時によめる

津輕路の高根を見ればいと寒く早や九重に雪を重ねて

野内宿出口左り關所へ懸る切手を問ふ。予答へけるは錢を取りて出す物故に取らず世を明かに旅行致す者にて錢を出して判を取るは明らか成るを味く致すが如しといひは、往來の書は有らずやといへる。往來は千ヶ寺參り二十餘拜皮籠負ひるか東西南北定めなき者共の事とそ覺ゆ。予四十餘國廻れ共行く所を指して通行す。遂に士の往來書を持事を聞かすと答へければ、書を認めて出たす。高山彦九郎殿と書せり。津輕中にては莊屋等か認めには殿を稱せず。予立つ時月澄て前に山有り後ろに海有りて佳景なり。何そ有り度事とて關を出つ。予歌讀て歩夫に渡し關守か方へ寄す。

關の戸をさすやよなく詠むらん浦山敷もすめる月哉

陸にては難所危しといへる故船に乗りぬ。船行面白し。右に岩山とうまゑの棧巖石多ふし。左りに湯の島北に裸島かもめ島とて三島有り。いと興に入りてよめる

硯の海筆も及はぬ秋の夜の月澄渡る浪のうねく

(三七) 壺碑の里談に碑を千人の多ふきにて曳けるに動かす。壺村よりつほといへる女出て、曳けるに、不日に成りて明神の所に至りける。埋めて社を立つ是を千曳大明神と號するとそ。壺の碑をよめる

古の壺の碑跡もなく荒果ぬれは誰に問まし

夜行に鹿を聞て

獨り行旅路淋しく鳴鹿の聲にそ連る、萩の夕風

或る家の屏風に書きたるを見て

松是千年友

千年迄榮行く松を友にして酒に萬の數やのふらん

竹上下有節

吳竹のその節々は人の上の禮と思ひて守れ世の中

鳩三枝有禮

鳥さへも其たらちねを敬の道をは知りぬ人の世の中

烏反甫有孝

たらちねを思ふ心の厚きより忘れすかへす養の道

五の戸宿りに着て手巾を洗ひけるに、老婆か水を惜しみて言る事有り。予怒る。傍らより博徒か言を出たせる事有りける。風俗宜しからず、寝ぬるに着る物も有らぬと言る故、疊をとて身の上に置ひて寝ねける。いねて後によめる

身に覆ふ物も有らぬとみち奥の道なき民の心さぶしも

(三八) 仁井田入口三十餘の圮橋を渡る、宿らん事を乞へとも許さず。十日市に及んで暮に及ひ、雨降り来る。又た宿らん事を欲すれとも宿らしめず。暫くにして晴れて朗かなり。仰きてよめる

宿るへき里もあらねは獨り行く旅の空なる月のさやけさ

(三九) 田代より小道三十里巽に来る。山路木々紅葉す坂多ふけれ共なるべし。行々紅葉をよめる

行人もあらぬ山路の見る物は錦にまかふ紅葉なりけり

爰の山かしこの谷も紅葉して何れを先に我や詠めん

八日市神明の宵祭なりとて參詣あり。予も詣つ。淨衣烏帽子のひと數人、麻上下袴の者多ふし。庭火を焼けり。讀る

千早振神代の事を傳へてや庭火たきつゝ祭りをそする

五日市を東へ出て大坂の一本橋とて五間計の橋を渡る。誠に木一本を打渡し名に應ふといふへし。是を夫木集政村の歌に、朽残る野田の入江の一つ橋心細くも身をふりにける、とあるは此所なるへし。入江と思ふは見えず。砂濱の廣く南北の山の間十五六丁も有りて、其間は皆砂濱なれば古へは入江なるへし。予よめる

年経れば替れる物や今野田の入江もなみの磯となりけり

(三五)野田の玉川は五間計りの川なり。一本橋にて渡る。玉川村人家二十軒計り、玉川の源は是より西
小道十五里計り、玉川はたと言ひる所より流れ來るといふ。玉川の里にてよめる

此里の人は夜なく朝なく汐風ともに千鳥聞らん

陸奥の野田の玉川秋たけて汐風(寒)み千鳥鳴らん

初霜をよめる

山人の行來も見えぬ一つ橋我れ獨り踏む今朝の初霜

八日町今日は秋葉權現の祭なり。山伏舞ひ有り、笑ふに堪へたり。暮に及びて雨少く降る。夜風吹く。寝ねけるに今宵も夜具なく疊を着たり。風すき間より吹入れて寒し。よめる

草枕假の宿りをおとつれて身にしむ計り風の吹き來る

今宵寐ねて後寒く、又起て爐に寄る事ありて寐ねける。今宵の歌

草枕假寐の隙もいとまなし急くに暮る、秋の短かさ

今朝水を始て見る。よめる

いと寒し身にしむ程に思ひ出て、外面に氷今朝見初つる

(三〇)琥珀山に入りて琥珀の筋を見つるに、此の筋の上り下りに必らすあるものとして、堀りて數々琥珀を予に寄せけるに付てよめる

山深く分け入てこそ光りある玉の有りとは知らる、物を

幸助所へ寄るに琥珀及び摺り屑など、夫婦共に(贈)餞贖としける故に磁石を與へ侍る。昨日山開らきに御酒を賜はる吉事なりとて悦へる故讀て殘し侍りぬ。山開らきに予神酒を進めけるによめる

行末は限りも知らす玉や出ん山口しるく我れいはひつる

山の紅葉を風の吹きけるを見てよめる

山路行く紅葉を風の吹時は錦織なす機やとそ見る

親子の慈孝を譽て慈父に讀て與へ侍る

うつくしむ親の心の厚きより子も又思ふ養の道

宿りの主夜更る迄摺白挽の急しきに、歌讀ければ、主しか求めによりて書て與へ侍る
いとまなみ夜半とも知らず賤か家の杉の板目の月そ更ぬる

となん蘆深く寐るへき所もなく見えけるによめる

秋たけて賤か伏屋に宿かれは稻葉のちりそ敷寐なりける

とそ民の淳素なるに國廻れる者の讀て残せる歌

民草も恵み懸くてう言の葉の露も忘れぬ君をしそ思ふ

とそ三平なるものゝ乞ふによりて讀て與へ侍る

敬の道を忘るな是そ此身はたらちねのかたみと思ひて

予十月には必ず歸府致すへしと人々に約せし事を思ふてよめる

秋過て冬は歸ると夕時雨月なみこさし末の松山

寛政二年九月二十三日川平村家七八軒彼方此方と二三軒へ立寄りて宿を乞ふに、或は病を以て斷

り、或は亭主他出なといひて許さす。久太成る家に入りて理を盡して乞へとも是も許さよりけれ
共、歌一首を讀て出しけるに異儀なく宿らしめける。歌爰に載す。山里に宿りを乞ふとよめる

旅人の往來も絶ぬことゝ聞く陸奥にも道あれはこそ

庭に出てゝ讀める

朝起て四方の梢を詠れば夜半の時雨に色増りけり

ぬるが内に時雨の雨の染なして朝日照り添ふ木々の紅葉

川平村を立ち辰の半より雨降る山を登りて西の方へ迷ひ入る事五六里と覺しき木立なれ共家はあ
らす。是も餓へて絶へたる里に見ゆ。よめる

住人も有らばそ問ん道をしもなくく過る世のはかなさに

となん歸りて又道を求て行く。磁石を立て見るに北へさしたる道なれば、歸りて本の所に於てよ
み考へて西南の方と道を求めて行く。よめる

道知るへあらはそ嬉し八ちまたに立て煩ふ何つ地行らん

夏坂村入口右に番所有り。家十軒餓年に半は減んす。西に來る。組頭五兵衛なるか所へ入りて宿りを乞ふ。他出なりといひる故爐によりて待ちぬ。よめる

宿かしねかさは嬉しと立寄るに主し居らねは待そ煩ふ

子と婦とは粟の飯喰ふて、大母と母とは白妙の雪かと思ゆる計りなる米の飯を進め、いとねもころに事ふることのありかたさに

學ひつる事もあらねと自ら教にかなふ山蔭の庵

誠なる心の儘や天地の道にそかなふ山蔭の庵

教なき心のまゝの其まゝの道こそ高し山蔭の庵

檢斷か所へ入りし時に表口よりの言に是れへとて達ち手を引き夷踞して答へける。無禮を思みて讀る。爰に載せ侍る。禮なき人は人に非ず、禮有を以て人とはいふ、人にあらずは何とか言ん。

人見ても人を敬ふ道知らすましまし山の奥なる

早朝に霜を見てよめる

賤か家の庭の塵さへうつもれて雪かと計り見ゆる朝霜

道の右に錦木塚八間計り塚の上に岩一つ有り女石と號す。是女のしるしとそ。杉木一本有り男のしるしとそ。岩の大き五尺計り細布を織りし女も戀し男も千束の錦木共に爰に埋めしよし。塚より乾の方二三丁にして古川村黒澤兵之丞所へ至る。是れ錦木塚の古人といへる者なり。細布も此妻齋みして織る。黒澤氏古昔を物語る。上古より西十丁計りに芦田原と申所ありて毎日市立有りける。其邊り六十計りの田夫一女の美麗なるを養ひける。即ち此古川狭の里をいへり。其女織る事を克くし鳥の羽など織交へて美はしき事言かたなし。毎日芦田原へ持出て賣る。人々是を見て是を錦ともいへる物なるへし、只人にあらず神なりと感じけるに、其頃廣川原といへる所に一男子あり、錦木を採色して是を市に賣りける。此男彼の美女を見初めて戀慕の情止む事なうて妻たらん事をこふに、女いなひていへるは、我れに親有り親の命ならて夫の妻とならば淫奔の名恐るといへるにより、其賣る所の錦木を毎夜通ふて門に立つ。其通へる時は紀伊國坂の下なる松桂か谷にてふくろうさいづり狐か崎にて狐鳴く。行て三年迄通ひけるに親の心に叶はぬ事なれば錦木取り入るゝ事もあらず。女も男か心に感して病となる。彼の男か通ひたる道を狭の細道とて古川の東に當りて今にあり。歸る時に泪を拭ひ洗ひたる所を泪川とて今に流る。霜露も下りぬ

と傳へたり。女は終に病となりて死す。男も其死を聞て今は世に思ふへき事も非すとて病て死す。親其死を痛み悔ひ、女と男と千束の錦木共に埋て塚を筑く。是即ち錦木塚なりと申す。寛政二年秋末つかたに錦木塚を弔ひてよめる

錦木の千束の跡を思ひ來るに袖も時雨にぬるる頃かも

予黒澤氏に宿りを乞ふに、候より嚴敷申し付られて人を留る事ならずと許さす、予歌讀て出す。此所即ち狹の里なればけふの里に宿りを乞ふてよめる

陸奥のけふの細布せはくとも心計りは逢はんとそ思ふ

となん。留め參らすへしとて悦ひ馳走し留めける。今宵雜魚を帆立貝に煮て濁酒をあつち主し黒澤秀公と酌む。悦ひの餘りによめる

思ふとち思ひの儘に語りつゝ濁れる酒を酌そ樂しき

今朝雲の山に降りたるを見てよめる

けふの里に今朝起き見れば白妙に降りつむものは秋の初霜

(三三) 湯瀬に宿り道に雪白く積りたるを見て讀る

また秋のうちなりなから白妙の雪踏分けて行も珍らし

敬神に身を慎む事の厚きに感して

敬の道一筋そ山里の人の心は神も守らん

阿部氏の歌に、露結ふ草の庵りに宿かせは今日の別れに袖そぬれける。予返し

別れても又も逢ひ見ん言葉の露も忘れぬ君をしそ思ふ

宿りの妻か子を育するを見て

子を思ふ心も厚く賤の女かいろく衣打重ねけり

七時雨を越ゆる時に、風烈しく稀れに有る梢を見るに落葉してそ有りける。日に七度時雨るとして七時雨と名付けたりと聞てよめる

風に散りて紅葉も今はあらはなる梢よりこそ冬は來ぬらん

雪の降るをよめる

神無月時雨の雨は降るものを雪そ積れり深山邊の里

休へるうちに雪止みぬと見へける

神無月降りみ降らすみ雪降りて雪に時雨る、深山邊の里

寒けき雪の日にも着る物もあらすごしけるを哀れに思ひて、故に麻布をぬきて幼きに與へ、其名を問へは松とそ答へし

行末の榮そしるき松と聞けは千年の坂も越へんとそ思ふ

萩折といふ新酒とて出しけるも濁り酒に似たりければ、亞聖酒とも言はめと思ふて

濁れるを賢き酒と聞くなれば是は聖につくといふらん

(三三) 岩鷲山を見るに淺間山にさも似たり。予十九歳の時に六里か原を經る心ちぞする。よめる

立登る煙はあらて白妙の雪降り積じ淺間山かも

今宵の宿りも破れ家にて、戸板の破れたるを爐の邊に立かけ風を凌きたるも、後には破れ果て、すへきやうなく、寐る時も疊席なと打かけて寐ぬ。深更に風強く吹き入て睡る事ならすそ有りける。

柴の戸を差入る夜半の風寒み旅の枕に夢も結はす

民の淳素なるを見て國廻れる者の残せる歌

君に仕ふ心も厚く民草に恵みかくてう言の葉思へ

此歌は南部の虐政を悪みてよめるとかや、皇の御代惶みて東より、大宮柱太敷立て齋き奉らる、誠に賢き御代と申すへし。左も有らぬ所はいと見苦し。己か家居をは取り飾り候の事をは露も思はず、まめならぬわさそ人にして人にあらず。

民を恵み君を敬ふ時なれば賢き御代と思ひ知らすや

君を思ふ心もあらぬ人をこそ人にもあらぬものとやいはん

人ならぬ物ならははや海越て蝦夷か千島へ放ちやらなん

雪益々降る。我子義介竹駒か君の寒さを思ひやはやと言ひ越したりつる歌思ひ出てよめる

さらぬたに寒むからめやと思ふ子の雪の旅路は何とか言ふらん

また川又氏の卜筮に待ち居るとありけるを思ひ出てよめる

親を思ふ心厚しと白妙の雪踏分けて行くは誰か子よ

昨夜とは打替りて家に有る所の物取り着せられたは、暖かなりけるをよめる

寒からず賤か心の厚きよりいろく衣重ね着すれば

今夜雪降る。衣川にてよめる

夏立て冬にそ着つる衣川川風寒み氷るなりけり

光堂は七寶莊嚴の柱と聞けとも、ふるひたれば光らす。狂歌し侍る

光堂何か光かと思ひしに錢こそ光る物にそ有ける

詞花集和泉式部か歌に、諸共にたしまし物を陸奥の衣か關を餘所に聞哉とあるを思ひ出てよめる

る

余所ならず身にかけてきぬる衣川折しも雪そ寒けかりける

北上川の瀬移りて今は衣か關の西を流るゝをよめる

年を経ていともさかしき川浪に衣か關も余所になりけり

郡山大人の信せられ給へるを悦へる餘りによめる

花ならん文の榮や陸奥に道をそ開く行末のはる

郡山氏にて雪の降りける暮によめる

夏立て冬にきぬれはいと寒し衣か關の雪の夕暮

北川先生とも申進らすへき賢き人の家に宿りて、放心をおさむといへる古き言の葉を思ひ出てよめる

放れたる心もかゝる陸奥に東稻山の有そ嬉しき

郡山道弘返し、又こんと言し言の葉たかへすは東稻山の櫻咲く頃となん櫻の御歌に答へ進らせて

櫻咲頃も忘れず我れもこんさねこん頃の人の誠に

南部の荒野を経て仙臺の地に入り、郡山大人を尋ね進らせて

たとうへきものもあら野を踏分て道ある家に入そ嬉しき

法正寺に入り七不思議を見て孫兵衛所へ歸へるに、妻のみにて斷りて宿を許さず。肝煎り莊之丞に宿を乞ふに、獨行なれば成るましきよしひける。予歌讀み乞ふて遂に宿す

連れもなき我れなりなから世の中の情はありて宿はかしつれ

菊花を見てよめる

雪霜も厭はて咲ける菊の花匂ひやかくす山蔭にして

司祀の家に宿りて讀て殘し侍る

神も人も恵みは同し隔てなく子を思ふ程に親を思は

今夜蕪粥にてそ有りける。單の物にて疊を打ち着て寐ぬ。宿りの主しきりともと思ふの餘りに寐

てよめる

思はしよはるく問ひし甲斐もなくあらぬ宿りに假寝せんとは

今宵宿りの戸外を見てよめる

雪かたとそ思ふ計に立出て、見ればさやけき月にそ有りける

北上川船渡し百間餘と見ゆ。船子を待の久しきによめる。此所薄衣なれば

名にしおへは身にしみ渡る寒けさの風に船子を待そ久しき

猿田彦の立せ給ふ所にて神酒戴きて謹てよめる

かしこくも神酒の恵みを玉銚の道をや守る我が行末も

栗原郡仙臺領山間の里を経て奈良坂村に至りて暮る。子待せる家に入りて宿りを乞に許さぬのみかは、案内もなく人家に入ると言ひて怒りぬ。予歌讀て出たす。遂に宿るになりける。歌爰に載せ侍る。しひて宿りを乞ふて

世はなさけ有りといふなる許してよ明なは歸る假の宿りを

又よめる

敷島の道こそ高し天さかる鄙さへも猶仰くと思へは

今宵爐邊に丸寝しける子待の者共の中に起き出るとて、夜は寒し衣は薄し神無月とそ言ひける。予侍る。いかて過さん年の寒をとそ、又よみけるは

薄くとも寒くもあらず仰きても天にも恥ぬ我と知らずや

(三門) 姉齒松の里誌に云、昔氣仙に武日長者とて有りけるか、其姫に姉を朝日と言ひ妹を夕日といふ。

朝日姫筑紫の肥前松浦へ下るとて、此所に於て死す。其妹夕日姫尋ね來りて姉を葬埋して松を植ゆ、是即ち姉葉の松なりとなん。姉齒の松にて讀る歌

はるくくと尋ねて今日は栗原や姉齒の松の名こそふりけれ

おたへの橋にてよめる

白玉のおたへの橋と聞からに踏まゝくおしく立そ煩ふ

馬子が馬に乗り給へといふに付きてよめる

馬子等よ馬をかさはやはたこ馬はたてはなしに有は乗らめや

陸奥の千賀の浦の鹽籠の鐵燈籠の扉に月日を彫て、文治三年和泉三郎忠衡と文字あり。世に聞へし武士の奉りしまゝに残れる事、あはれ其古へを見るか如く思ひ出てよめる

功しのゆゝしかしこし 武夫の名は久堅の 天照す月日と共に 萬代に絶る

事なく つかの木の彌續々に 語り次言次來つる 陸奥の千賀の浦輪の 浦

清く蝦夷の千島ゆ 打寄る奥津白浪 しくくに通はさらめや 邊津浪の絶

さらめやも 常盤木の緑數添ふ 松島の名に立磯に 玉ちはふ神の御前の

燈の照りこそ増れ 光りこそ彌増れこそ 今も尙影こそ移れ 其影をしたは

さらめや めてさらめやは

天津とふ月日と共に 武夫の真心照す眞鐵扉に

平仲繩陸奥の名たる所見にとて此浦をわたり侍に、別に臨み梅の花見を贈るとて、
(三五) 藤塚知明、

隔つとも籬か島の言の葉に匂ひを添よ梅の花貝。予も返しよめる

隔りし籬か島の言の葉も先咲梅の千賀の鹽竈

富山に登りて海を望めは松島一目日本第一の風景とかや

雪に隠れ風にあらはる富山の望に及ふ言の葉もなし

又雨の霽たりければ

天地の恵の露やかゝるらん緑に見ゆる松島の浦

寛政二年十月二十一日仙臺元茶島芝田町林子平子の兄嘉膳の宅へ尋ぬ。子平か子は他出嘉膳子出

て、終に宿す。夜に入りて入湯す。珍平丙吉申平皆嘉膳子の子なり。堤より大道一里半異なり。

頃日大に草臥て今夜心克そ寝ねける。懐古覽古の心にも有りつるや、夢中に歌よみける

花とのみ榮へし家も散り果て今は野原の霜となりけり

寛政二年十月二十三日林子平子物語りに、去年三四月頃白川侯仙臺の留主居を呼はれ、子平子越

智友直を尋ねらる、其儘沙汰なしのよし、友直の疑問はれすは安かるへきにおとすれて末白川の

言の葉そうきとなん聞へけるによめる。越智の友直なる友垣かよめる末の言葉を取りて

言の葉の露の恵みもかゝる世におふくま川の末そ樂しき

林子平子海國兵談の印の歌とて、傳へては我日の本の兵の法の花さけ五百年の後、友直か末の言
葉を取りて讀る

五百年の末の松山外か濱浪風立し蝦夷か千島も

林友諒と共に宮城野を望みて、歌讀玉へとありけるによめる

出て、見ればははきさへもなく此ころは冬枯にけり宮城の、原

高山氏なる人出羽の國の海山をめくり盡して、津かる十の戸をも跋わたり、此頃宮城あたりのや
つかれか家に十日あまりやすらひてのち、上毛野の古郷へ歸る時讀ておくりけり。擬陸奥振林子
平越智友直五月雨に家を出羽りし高山かけふふる郷へ雪のみちの奥、只獨り百日の旅もたとらす
て陸奥にも道はありてう、物うすく情を厚き家つとに陸奥路の雪のふるさと。冬の日正之の主の
故郷へかへるを送り参らすうた林珍平越智友通、あひなれし袂もひちて立別る雪の旅寢の寒さ
をそしる。正之の主の上津毛に歸るをおくる林丙吉越智通次、いとゝさへ寒さ増りて立別る冬の

旅寝の雪のあかつき。高山君送別林申平越智通郷。旅衣立別れ行く陸奥の雪の山路を獨りこゆらん。予別れに望み歌よみて林家諸子へ送り侍る

ふる雪の八かさ積らは陸奥の道有る家に又歸り來ん

荒井行教に文の道をも開らき給ひと進め參らせて

立別れ又も逢ひ見ん陸奥に道をそ開らけ行末の空

寛政二年十一月陸奥國白川原町茶店虎屋平助に休ふ。山形の人京都醍醐三寶院より先月二十日出にて爰に休ふに逢ふ。還幸當月二十日後の御事に語る。虎屋に宿して江戸鎌次正前野達への書を認む。歌一首を入る。都へ上るとて

翅あらは飛んとそ思ふうらくと雲井の空を仰く嬉しき

天か下は皆我友なりとて、逢隈川の邊に讀て残し侍る

交りの道こそ深く思ふとち逢隈川の流れ絶へせす

孝馬兒留助黒羽迄送り來にけるに、敬身是れ孝なる事を示し侍りて

たらちねの親のかたみと此身をは思ひ忘るな敬みのこと

芦田の原にてよめる

夜をこめて旅路はるかに信濃なる芦田の原をあした經にけり

鏡山を見てよめる

皇の高き木かけを仰きつる鏡の山にかゝる嬉しさ

寛政二年十一月三十晦日丑の刻計りに大津を立ち、白川橋にて手水し禮服す。三條橋に至りて恐れみ惶れみ敬み謹みて寶祚長久を頓首拜し奉りてよめる

陸奥の八重の山路を跋分てけふ九重に入そ嬉しき

觀五四廿高山五々燈十八首

高山朽葉集 卷之四

贈正四位高山正之歌七十八首

寛政二年庚戌冬十二月朔日髪をおさめ身を清め、新らしき麻上下にて堺町を上りて、恐れみ惶れみ敬み謹み奉りて堺町の御門を入り、右の方に 仙洞御所を恐れみおそれみ敬み謹み奉りて頓首し拜し奉る。猶北へ上りて左りへ折れ恐れみ惶れみ敬み謹み奉りて 禁裏南門を右に見上げ奉りて頓首し、土上に拜し奉り是より諸門を拜し奉る事同し。乾御門を敬みて出て都へ上りて雪の降りけるを見て

豊なる年の貢とけふはしも雪降り積る四方の山く

十二月十四日芝山持豊卿和歌會おさめ寄松祝の通り題をよめる

岩かねの松の緑も今年より猶幾千代の色や増らん

我子義介竹駒へは慕參代參勤めよとて送る歌

參るへき時しあらねはあはれにもはるかに思ふ奥つきのもと

句の御節會萬歳樂を讀み奉る

七重八重けふ九重の都にも千代萬代の聲そゆたけき

久振にて希人に逢ふて澁谷葵足、めくりあへは昔語りと也にけり我佛けも老にけらしなとありけるかへし

老ぬとて何をかくやむ言の葉の妙なる玉の音そ樂しき

歳暮の歌とて

かしこまる七重のひさや九重の都に年を送る嬉しさ

寛政三年辛亥正月元日麻上下にて明の方を拜し奉り國の方へ向ひ、伊賀鎮得の靈神を拜し、祖先より考妣に及ふ迄拜禮しける也。始諸神を拜して爰に及ふ。元旦の歌

空に着る衣や今朝はほのく霞そかゝる九重の春

三位岩倉具選卿、栗原の姉齒の松の一枝は都のつとに君や折るらしとありける御返し

折つれば都のつと、なりにつり言の葉嬉し君に得られて

今日岩倉三位殿御香の時に

今日はしも霞にけりな八重一重猶九重の春そゆたけき

となん讀て參らせければ奥へ遣りぬとて出てられける

二十四日御會始の題禁中佳趣とありける恐れみ畏れみ敬み慎みて

春來れば御はしの櫻橘と竹も生ひそふ事のうれしも

梅つほの花も咲らん今年より千代萬世の春を重ねて

三橋勝馨、今も猶直なる道の言の葉は千代を経るとも語り盡せしとありける返し

語るともいかてか盡ん言の葉の妙なる音は玉かとそきけ

若槻源三郎人日に用る七種を取り集て、西山正へ寄す。其包紙に千世祝ふ子の日の若菜萬代と君か爲にそ摘そへにけるとなん、西山正返し、摘て越し此七種の初若菜我外國の家つとにせんと

そ、予も讀て其包紙の後へに出付侍る。朋友の信を感じ參らせて

摘添て寄る心の信なる其友垣の道そかしこき

南都鍋屋町林多宗直へ 御幸始めの事を知らせ歌一首を寄す。禁中佳趣

皇の御代かしこみて東より西より南人そ集まる

君かひとふしに催されて佐保山の樵もかくなんうたへる林田宗直 皇の光りよりして成つらん金の殿も玉の臺もとなん返し歌せられしとそ

松間梅花

色も香も共にかへしと常盤なる松のそかえに見ゆる梅かえ

伏原三位宣光卿釋奠に獻し玉ひける詩を和歌によめる

春松應合權といふ御題をよめる

君か代を千年にいはふ松が枝のもとにそ酌める春の嬉しさ

日暖釋霞上苑春

長閑しな春立今日の朝日かけ猶九重に還る嬉しさ

高松千歳老龍鱗

古の聖の道の高をは松の千年に我れいわ井^はつる

綠陰相映總含翠

野邊に出て、見れはや四方の山くも雪解初て緑をそ見る

自是韶光佳色新

皇の御代かしこみて今年より春の光りと仰く民草

寛政三年二月八日岩倉殿今朝 仙洞御所宿直より退出有りて、予か爲に 仙洞御所玉階の下なる

梅花二枝を賜はる。予恐れみ謹みて歌一首を讀て奉書紙に書し、謹みて梅枝を包みて三位殿の前

に出たしける。歌爰に載す。

かしこしな匂ひも高き梅の花賤き民にかゝる恵みは

宇治山より南を見れば梅尤も多^はふし

惜むより折られぬからに梅の花匂ひをとめて家つとにせん

雨の降りけるによめる

雨さへも匂ひをとめて降りつらん梅さかりなるけふと見ゆれば

夜に及ひて梅谷に入りて

雪かと思ふ斗りの梅の花匂ひをとめてそれと知れつる

蓮沼政徳^(四〇)成六月十三日の日付の書中歌ありたらちねの子を思ふ身は誰もかも同じ心を我そ勤むる

となん有りける返し

子を思ふ心を知れる人をこそ頼みある人とわれ頼みにき

藥次正^(四一)へ其祖母と次男藤八か死を悲しみて書を認めぬる沈香に歌を寄す。爰に載す

かなしとも何ともいはむ言の葉もあらぬ斗りに袖しほりつゝ

岩倉三位具選卿上巳に雪を見て、めつらしき雪にえならぬ色そわく柳の緑桃のくれなゐとの歌賜ひける返し

雪や花はなや雪とそ詠めつるえならぬけさの色の珍らし

諸卿と鞍馬に遊ひて酔のまに、くよめる

詠るに中く盡ぬ鞍馬山くれなは春の月にゆかなん

貴も賤き人も打むれて共に遊へる野邊の樂しさ

小町寺にてよめる

花の色の移り行く身そ憐なる其古を問につけても

志水南涯の次男林藏年十三畫をなし、はさみにて克禽獸人物の形を作る妙なり。互に子をほめ合ふて

ふて

親は子を思ふものとそ春雨に酌つゝ語ることの嬉しも

岩倉三位具選卿の慎みて語られるは、中ノ院(四三)通村卿は通勝卿の子なり、江戸に止めらる。四五

年にして京都へ歸へり參内せられるに武家の法を板に書して階下に立るを見られて、番刀をと

て取りて切られたり。是より其儘にて立さりしとそ。また 天子茶を好み給ふて茶碗の古きを召

し玉ふて諸卿へ見せ給ふ。通村卿忽ち打破り玉ふて 天子斯く故く何者の手にふれたるも知るべ

からさるを玩ひ給ふ事やあると諫争申上たりけるに、制て曰、可なりとそ。通茂卿は通村卿の孫

なり。ある時に 宸筆を給ひける事の有りけるに 天子の書斯拙くては國の恥なり。後に殘して

は宜しからしとて引ききて火中にせり。 靈元帝聞し召して、能書とならせ給ひけるとそ。予明

朝具選卿へ心得の事を申し上くへしといひて寝ねぬる

世の中の事こそかたし如何にせん我身の外は敵とそ思へ

近藤翁の六十の賀に寄松祝

千年まで榮行松にかくろひて六十の春を向ふ樂しさ

宮井包繼枝折の歌を乞ふによめる

此頃は吉野の山の花盛り枝折て猶や奥を尋ねん

二條にて

川竹の身のならばはしと聞かからに我も定めぬ枕ならまし

岩倉家へ歸へり、富小路殿さそひによりて芝山家へ行く。富小路貞直(四四)卿慈光寺民部權大輔源尙仲(四五)卿と嵐山へ遊ぶ。予歌讀み侍る

言の葉も嵐の山の花盛り及はぬ色に恥る斗りそ

嵐山名にも流れて大井川散は櫻の花の白浪

入相の鐘には花の散るといふ言の葉いとふ春の夕暮

花にあらぬ詠めに暮るゝ春の夜の月もうつれる大井川浪

花や月つきや花とも詠めつるけふの今宵の言の葉やある

花は皆花にそなりける珍らしの言の葉さへも出ぬ斗そ

今十五日芝山持豊卿謹みて語られけるには、先月唐鑑御會の時に 天上の御沙汰ありける。續て

予も清二位殿申されける。天子能く知食して有けると語られける云々。泰安語るに 上様も知食しある時高山彦九郎といへるものを知れるやと御尋ね有ける。名をは久しく承りぬれ共相識にはあらぬよし 勅答申上ければ、聖護院の人になりて舞樂拜見せしにや、佐々木備後守と並ひて拜見せし氣質は色々のものなりなど委しく知食して有けると語る。恐れ入りたる事なりとて拜す。山科氏を立ちて二條を通り、深更に岩倉家へ歸へる。寛政三月十五日恐れみ畏れみ敬み謹みてよめる

われをわれとしろしめすとや皇の玉の御聲のかゝる嬉しさ

予謹みて船橋殿に向ふて 天上の御沙汰に及ひたるの忝なきを語れば、度々 天子仰せられける 先生の高名なりとありける。恐れ入りぬといへり。船橋家に於て酔に乗してよめる

九重の春を嬉しきけふはしも酒のみくらす事の樂しも

高山何かし吉野山の花見んとしけるころ、すこしおくれしかは讀て遣はしける。岩倉具選咲花の時過ぬれば尋ねとも吉野の山の甲斐やなからんと有りける御返し

かひなしと君か教への言の葉を吉野の花と我は見てまし

御室へ至るに人群聚す。宮の御殿を拜見す。花を見て友垣の歌讀みければ予も
花や人ひとや花とも見え分ぬ都のはるは錦なりけり

志水南涯より書を寄せて、江州高島郡知内村中川六左衛門なる縁家の所より湖中より得たりし緑
毛龜を送り越したるよし、至り見るに甲の長さ全尺二寸七分横一寸九分にてそ有りける。二三日
前に得たるよし小兒抱瘡のましないの爲め龜と盃せんと群聚す。緑毛龜をよめる

君か代の榮ゆく色や緑なる龜の尾長き春そ嬉しき

寛政三年春三月二十日巳の刻に身を清め禮服麻上下にて 仙洞御所新中納言 先帝寵姫の殿へ至
り、岩田老女へ就て恐れみ謹みて 天子聖徳文治の故に神龜の出現を申して、緑毛龜淵鑑類函曰
龜有毛者文治之兆寛政三年辛亥春三月頓首百拜正之謹考と書して出す云々 仙洞御所より龜持參
の事申來る。走りて岩倉家へ歸へり麻上下になりて申の刻に南涯に龜を持たしめて、共に麻上下
禮服にて 洞中新中納言の殿に至る。岩田老女及び侍女兩人にて龜を桶の中へ入れて 仙洞御所
觀覽ある。新中納言の君より干菓子を給ふ。暮に及びて下部に文箱を給ふ。今上皇帝御製、むく
ら生ひ茂りて道もわかぬ世にふるは涙の雨にそ有ける、予 聖恩の忝きを恐れみ畏れみ敬み謹み

頓首々々百拜して讀て報ひ奉る

夏草の心の儘に茂れともいつかは秋に逢はて過くへき

とそ。悦ひ是にしく事もあらしとて歛嬉してよめる

玉鉾の道の榮や萬代に龜も緑の色を見すらし

寛政三年三月三十晦日岩倉三位殿に従ふて、雜色にて 仙洞御所御樂始めに従行す。歸へれば新
中納言殿よりふみ有り。急き日中前 禁中長橋局へ神龜持參有るへきのよし申し來る。走て南涯
へ告げ髪を脩め浴し麻上下にて南涯と共に堺町御門を入り、南門を経て 禁裏御臺所御門を入り
て長橋勾當内侍御内常木千三取次にて長橋局へ神龜を達す。時に巳の刻雨降り來る。日中に及ん
て神龜下る。常木述へけるは珍らしく目出度物の差出さる。 觀覽に備はり御滿悦に思召さる。猶
又委き事は新中納言殿より申し進んせらるへし。御大切の龜なれば先つは御下ケ玉給ふなりとそ。
恐れみ敬みて常木を以て獻しけるは緑毛龜淵鑑類函曰龜有毛者文治之兆寛政三年辛亥春三月頓首
々々百拜正之謹考龜主志水喜間多菅周監上ノ州新田高山彦九郎平正之と書して侍りけるなり。緑
毛龜者文治之兆と見侍りて

天の下ふみも榮へん君か代と龜も緑の長き毛衣

仙洞御所より仕丁にて仰せ有り。宮本包繼參るに果して龜の事にてそ有ける。明朝辰の半に罷出へきの命なりける。翌朝南涯所へ入り、急き龜持參致すへしといひて身を清め、岩倉家へ歸へり元宣か參るを待つ。駒井正康付き添ふて洞中御所御門を入り非藏人口へ申し、内々の所へ上りける。岩倉具選卿出てられ、吉田對馬など對し辰の刻斗りに藤丸具集殿出てられ緑毛龜體に請取りぬとありて立たれ、仙洞御所御池へ放ち給ふ。予恐れみ惶れみ敬み謹み讀て奉る

君か代は千代に八ちよに萬代に龜も緑の御池にそ住む

芝山殿へ至る。和歌會始めなり。歌客二三十人予は公卿の席へ出つ、鶯(四六)尾大納言殿勸修寺當ノ辨殿甘露寺穂波殿と酌みける。松間梅花の題をよめる

松か枝の雪かと見ればこの頃の千里の外も匂ふ梅かえ
緑なる松の雪かと詠むれば遠里野邊に匂ふ梅かえ
色も香も常盤にならへ山松のそかひに見ゆる雪の梅か枝

諸卿と叡山に登りて天臺守節尊者を訪ふに逢はす。各々詩有り。予は歌を讀る

雲分ち尋ねし山のかいもあらず人は谷深く花や摘らん

夢の中に歌讀ける

我國の道は榮へん陸奥のたはしね山を見るに付けても

天覽玉芙蓉

一重二重三重四重五重九重に富士をそ見する紫の玉

芝山家月並歌會題測草をよめる

夏山の草分け越へて澗間なる水の流れを見るそ涼しき

志水南涯へ入る。林藏周監船橋家より楊枝差を受けたり。鳥を畫く。予歌讀て書付ける

かそいろの恵み忘れぬ言の葉は鳥の鳥に残るとそおもへ

岩倉家立春の題にて

起出て、見れば流れもうらくと氷の下に春や立つらん
佐保姫の霞の衣たちそめて春を緑の四方の山まゆ

又柳の題にて

春風の吹そめしより青柳のいと珍らしき色とこそ見ゆれカ

又鶯の題にて

長閑なる春の風にや誘はれて谷の戸出る鶯の聲

又瞿麥の題にて

たらちねの恵みそかゝる撫子の露忘れす風をいたみし
ぬるがうちに夢も結はすところ夏の露たはゝなる今朝の涼しさ

又蟬の題にて

夕立の晴れ行跡になく蟬の聲も涼しき夏の山かけ

梢より落くるものは夕立の晴れ間にきおふ蟬の諸聲

名脱カ寛藏か女につく。芳竹の内何れにてもといふに竹をよしといへり。酒二升に歌を寄す

千代榮ふ言の葉しるし若竹の生立道も直ならまし

加茂川に御そき祓してよめる

千早振神代よりかもけふしかも加茂の川原にみそきをそする

加茂川の清き流れにみそきして心涼しきけふの夕風

岩倉家に於て庭上松の題にて

四海浪静か成る代の時そとよ闇に聞ふ庭の松風

龍を夢に見たりける夜駒井氏宴を開きいわむたりつるによめる

雨雲のあらはや龍の夢見れば我も其尾に付かんとそ思ふ

立秋七夕

七夕の契りはけふそ立秋の桐の一葉を舟にかさまし
一年に一めぐりとや星合のころしも涼し天の川かせ

大島氏の居に入る。下鳥羽紀伊郡とす。來離の畫なる扇子を寄す。予源次郎に扇子を興へ侍る。
芙蓉行軒源子訓書なる額を見てよめる

夢とのみ思ふ斗そ思ひきや都をよそに爰に有りとは

醉中に笑ふて讀る。正康菊の句

川竹の身の習はしと菊の江の色香忘れぬ人をしそおもふ

清兵衛春野

春の野に遊し事も昔にて墓なく思ふ秋の夜の月

宮本は語らで有りけるを

新枕かはせし事も忘るゝはしらぬ筑紫のおそのたはれ男

予偶成の歌とて讀る

世の中はとにもかくにも天地の替らぬ御代を仰く斗そ

高山朽葉集 卷之五

贈正四位高山正之歌 百四十六首

寛政四年壬子春正月元日辛未曇る。肥後國熊本城下藪家(四八)に春を迎ふ。麻上下にて明の方を拜し恐
れみ惶れみ敬み慎みて 帝京の方を拜し奉りて諸神の拜祖先の拜に及ぶ事例の如し。雜煮など祝
ふ事替る事なし。

元旦をよめる

四方の山霞長閑に春の來て帝都みやこの空に向ふ嬉しさ

金峯山を望みて

今日こそは霞棚引三吉野のよし野の春と見ゆる斗りに

(四九)蓮臺寺に遊ひ、檜垣女の墓へ詣侍りて古の事など彼是思ひつけ侍りて

佛のさらけにありとは白川の流れて遠き昔しをそ思ふ

蓮臺寺に酒たうとふへて

古の佛やかく白川の流れの末を尋てそくむ

柏原山姥の御許に酌みて

足引の山の庵の言の葉を都のつとになさんとそ思ふ

心つくしの傍の山もと尋入玉結ふ人の言葉にすかりて、柏原妙實、山深き篠生の庵の露の身も月の
光りに隠れやはする、とそ

柏原老婆雪見し給ふと聞へて

豊なる御代のためしと白雪の降積山を君詠むらん

館のもとの田を見て感じ参らする歌

御寶守るや國の守なから忘れぬ爲に田をや詠めん

立春の歌

今日そとよ霞棚引不知火の筑紫の果も替らさりけり

(五〇) 高本教授案内にて肥後熊本時習館に折々遊び、諸道を見てよめる

玉鉾の道を祝ひてこのころの時の習を見るそ樂しき

又都の釋奠を思ふて興し奉る事も有らはやと祝ふ心に、寛政三年二月上丁の玉仁なる奠具を肥後の教授へ參らせてよめる

天地の有らん限りは榮へよと盡しの旅の中も忘れす

馬場にて騎射を見る。笠懸と聞てよめる

春立て見るや珍らし新田なる笠懸野原の神に祈らん

(五一) 時習館講師安野形助古溪堂に入る。吸物酒にて酌みける。安野か求めによりて酔ふてよめる

手に懸るものもあらねは目に見えぬ鬼の鳥根にいつ渡らまし

寛政四年正月十九日平正之の主都の方を思ひ出るよしあると聞て高本李順、去年の今日雲井に聞

し琴の音を山松風にさそ忍ふらしとありける返し

忍ふてう言の葉嬉し筑紫にも都を思ふ人も有りけり

忘我亭に語り居りけるに、山鳩の飛入りたるを祝ひて

足引の山に住てう鳥さへも知るや隔てぬ友垣の道

鬼界ヶ島に渡らんとて陸奥に遊へる人の安達ヶ原にて、古の安達ヶ原の黒塚も今は人住む里となりけりとなん讀りけるを思ひ出でて

陸奥の安達ヶ原に人住めは鬼の根鳥も角や折るらん

(五二) 夢中の歌とて齋藤高壽、唐土の人も見ららん紫の雲の中なる富士の明ほのと讀りけるに予よめる

明ほの、夢の中にも富士の根に登らんと思ふ人そ樂しき

音にのみ聞しなすの、古ことも又立歸る由井の濱風となん岩間氏の歌を見てよめる

武士の矢なみ繕ふ此頃も筑紫の果に忘れぬそよし

とかいりけるに齋藤高壽高山氏の志を感じて、日の本の多^はふき國にもあまたなき二人か中の永き契りはとそ

中路三郎秀長の里は回鷹峯の本と聞て

春立てはやきさらきになりにけり友とそ思ふ雁も歸らん

高山君に讀て捧けぬ杉浦勝永、西の海の浪のそなたもかゝる代の春は東も隔てあらしとなん、予心事を得ずして返し

隔てなき友垣集ふ事そ嬉し西も東も春めきにけり

霜の社の神を守るものに讀て參らす

神の社霜のはふりにいとまある年豊なる春そ長閑けき

千禮君に讀て興へ侍る

朝な〜起つゝ讀める四の書五つのりを忘るなよ君

春夜の題にて

うら〜と霞める今日も暮しつゝ又明なはと酌る春の夜

(五三) 夢中に義介竹駒の危しと思ふ事有りと見てよめる

子を思ふ心の綱のはなれねは共に千とせの坂を越なん

(五四) 我友富田大淵異國の事を承はらんといへるを聞て

むすこへやこまの戎の猛くとも我をやいかて襲ひ來らん

寛政四年子二月平正之か讀るに答て大鳳、みまなこまるしやをかけて寄るとも我日本の神や守らんとそ

京町藪氏の塾へ至りて、友とちの交りを感じ進らせて

友垣の隔も浪のうね〜に身も浮く斗りぬるゝ袂そ

釋迦院の山へ登るとて道しるへの奥に書付ける歌。寺川友定、諸共に行く心地そと里々の道のあなひを筆にまかせてとありける返し

任せ行く山路の友と鳥の跡見つゝ迷はて歸り來にけり

釋迦院上古は大山祇神を祭る。今は寺となるといふ。坂本迄堅志田より二里半、よめる

岩ね踏み越路の山に登るかと思ふ斗りに雪を降りける

(五五) 蒲池氏詩を寄せけるに答ふ

唐詩をたひける事の嬉しさに讀てそ寄する大和言の葉

辛島啓太君に讀て興へ侍る

朝なく起きてそ讀めよたらちねの親に事ふる道の教を

蕪孤山先生の唐詩たひけるに林和靖の故事あり。予返し參らせける

はるくと匂ひをとめし心より梅の林に遊ぶ嬉しさ

(五六) 草野雲平を訪ふ。吸物酒肴數々沽酒沽舗酒カならずといふによめる

こふ酒やこふほしゝをも喰ぬとふ言も嬉しく酌る盃

森恆か初戀の歌とて、入り初て分る方さへ迷ふかな戀の山路はまたしらぬ身も、予聞讀る

戀の山分行からに袖ぬれてつゆ忘れぬ事そ恥かし

(歌カ) 松有欽聲菊翁年賀歌數々見侍りて

君か住む宿のあたりの松風の萬代よはふ聲にならへる

菊翁歌讀て短冊に書て出す。又も來んほとそ今よりまたれける老の習ひの心つくしに、心と有りける下の言葉を取りて返し

心より待ちぬと君か言の葉を聞に嬉しも又歸り來ん

杉浦氏の許にて梅と月とを詠めて

梅の花匂や空に通ふらんおほろに見ゆる春の夜の月

高本氏へ歸へる。深更迄酌む。夜雨降る。雷聲有り、眞積を以て李順より歌を寄す。虫の戸を開らくとかいふ鳴る神の聲にや花の紐もとくらん、返し

紐ときて寝ねんとするに鳴神の音にそ花もほころひぬらん

不粘庵古流六十一歳歳旦に稚氣といひる句に付てよめる

六十まで重ねし年は昔にて今日より春の始とそしれ

(五七) 伊形氏文武興りたるを祝ひたる歌を見て

光りある時にな我は來にけりな嬉しな文と武士の道

又大村勝長、靜なる世にも忘れぬ武士のみかく矢先はゆきの身にしてとなん、勝長へ醉中讀て寄する

古の事も忘れず玉鉾の道をそまけぬものをしそ思ふ

當月四日金峯山猿すへりを若士共馬上にて下りたるを稱譽し、醉中に

猿すへり我もすへりて見つれとも中々君に及はしと思ふ

竹原支路へ讀て高壽へ託して寄る歌

逢ふよしもあらはや嬉し越へかたみいかにと我はは、かりの關

みちの國に遊び給ひける御許へ參らるとなん讀て寄するは

何といふ事もあらねとみちのくに遊びし跡を告んとそ思ふ

山口眞積歌讀て出す。春風に驚さそふ梅の花庭の緑の匂ひなるらん、返し

匂ふてう梅の緑もこのころは咲にけらしな雪と見るまで

森生故郷へ歸られけるをやかて尋ね參らせんとて

逢ふ事の有りとは先に知りなからしはし別れん後そうらみん

逍遙の翁の別れを送り參らるとて

流れ逢ふ水にそならふ君と我と別る、時も淡くも有りける

山西治郎へ歌を與ふる事有り

すらんてん給ひし事の嬉しきに君にそ残す大和言の葉

(五八) 辛島才藏別莊へ至る。今日詩會高本父子杉浦角助石井岡松生坐にあり。予讀るは

今日も又歌に暮しつ百敷の大宮人もかくや有るらん

中村友通に興ふる歌

思はしよ袖ふりかはす縁にしありて時を移しつ語へしとは

森生父の墓碑を營といへるに付、誌名の事なと談に及んで歌を興へ侍る

たらちねの親のしるしの石碑は再ひならぬ事とこそ思へ

和田翁の七十餘を壽參らせて

七十を越へて幾千代萬代の龜の尾長き年そ重ねん

無衣の客を思ふ事の厚を感じて

ほのかにも聞や嬉しの我を思ふ人の心の春そ長閑けき

寛政四年二月二十三日藪家へ入る。飯に酒出つ。歌を残し侍る。暫く語る。藪大人へ留別の歌と

て

我も又丈夫なれば忍ふとも別るゝ時に袖はぬらさし

歌讀て高本李順へ残す

忘るなよ我も忘れね水底のそこゐもあらぬ深き交り

高本氏にて熊本諸儒と別盃を酌み、大ひに宴す。諸客送別の詩歌今日のみ一袋と成る。高本氏より慶徳橋を経て長六橋にて藪高本を始として諸儒と別る。是れ迄二十五六人にてそ有りける。予留別の歌をよめる

大丈夫の旅にしあれはそゝかしと思ひと見ゆる人の倂

平井貞喬の送別の詩に、鵬鷗成羽翼願待搏長天と有りける唐詩に、大和歌もちて返し侍る

天津空に登らんと我思ひと羽根あらぬからに君をからはや

又佐方彦恆か寄る詩に此去薩陽多奇跡と有りける返し

薩摩湯何そ思はんひの國のたはれの島にしく物そなき

(五九)
寛政四年二月廿八日肥後國八代郡宮の地村に至り、西征將軍の宮 懷良親王の御墓有り、戌に向ふ。五輪の小さなるにて前の方別に石に征西將軍神儀と銘す。小高き所に悟眞寺とて禪院あり。親王の開基のよし。予 征西親王の御墓を拜す。血涙數行恐れみ謹みて讀て奉る

一度や二度三度ぬかつきてこほるゝものは涙なりけり

聽泉亭といふへき家に宿りてよめる

世の中のちりをや拂ふ山川の清き流れに耳すますらし

宮の地妙見、國常立尊なり。社領百石とそ。社へ參詣す。神主緒方大隅守大神惟英と酌みてよめる

せめてやは國の始の神なりとゆうはの川の魚奉れ

ある禪院に宿りてよめる

經つるあとを善も悪しきも有のまゝに語るを人の誠とはいふ

送別の諸友に讀て送る

別るとて丈夫顔にとゝめつる涙は落て川と流るゝ

宿りの子六才の童に讀て與へ侍る

忘るなよ朝なゝや夜なゝに恵みも深きそのたらちねに

次助なる磨師に小刀のさひを落さしめけるに代を與ふるに取らす返しける

不知火の筑紫に來ても鳥か鳴東も同し交りの道

玖摩川の邊りなる神官の家に宿りて

千早振神の社やいさきよき流れに望み酌そ樂しき

緒方大人七十餘り二つを賀し侍りて

七十に二つあまるとゆうは川其みなかみに幾代經ぬらん

腰の尾橋をよめる

見えわたる柴のあみはし目をあらみそこなも浪のおとそ恐ろし

神主甲斐重清重光に讀て與へ侍る

又も來んと思ひと遠き山の端の八重立雲を幾重越へなん

(六〇) 米良川の下流五鈴川と号す。手水せり。袴禮服にて金丸氏の祀れる屋敷の内東に向ひたる天照皇太神を拜し奉る。神酒奉りてよめる

千早振神の誓ひや嬉しくも五鈴の川の流れにそくむ

市兵衛なるもの予の書表を乞ふ。其上によめるうた

草枕旅になれにし我なからかゝらんことは露もあらなく

彈琴松のもとにて讀る

緑にも色添ふ春や琴ひきの松風きえし音そゆたけき

鶴契退年といひる題を見て、八十二翁を賀して殘し侍る

八十餘り二年重ねつるといふ言の葉契る千代萬代を

八つになりける娘に讀て與へ侍る

今年八つと聞にそいとゝ覺ほゆる我子も同しとしと見るにも

旅の空行々よめる

我を思ふ人は有りともしもあらずとも戀しかりける故郷のそら

心見川といふ所にてよめる

旅衣ぬれぬそよしや足うらに踏てそ人のこゝろみの川

心なき人の家に宿りてよめる

草枕片敷袖のぬるゝとも露不知火の人そつれなき

ある人戀歌よめる題にて予も

寄風戀

春風を慕ふ心や山櫻散て流るゝ谷川の水

寄雨戀

降る雨を見るにそいとゝぬるゝかな袂に人のうつる斗りに

寄月戀

月草を見るにそ我は覺ほゆる人の心のうつろはてとよ

遙に深山幽谷に入り、大河内を尋ねれ共、細道二つ左右分ち難く、暫く案して居りける。左の道には山櫻の一木花盛に見ゆ。よめる

言問ん人もあらねは山櫻我行先の道しるへせよ

市房六社大権現の社へ登りて、躑躅の花を土産とす。

山のねを見つゝ筑紫の果に來て替らぬものは花にそ有ける

某の山賤か句に、櫻さく頃は人見る庵すまひ如水とそ。奇特に思ひ侍る。乞ふによりて歌讀て與ふ。

我も又桃の巖ねを尋ねこしとゆうはの河のもとに住まはや

女島の松を見てよめる

色かへぬ女島の松は岩にふして浪靜かなる世をや契らん

寛政壬子春三月三日の日清音亭にて讀る

世の中のうきを忘れて溪川の清き流れに耳すますらん

人々と矢筈岳に登りて歸へり酌みてよめる

草も木もなひかさんとや梓弓矢筈の岳に登る嬉しさ

寛政四年三月五日肥後と薩摩の堺の川を渡るとて

爰迄も送る心や玉鉾の道を守りの人をしそ思ふ

予海上を望みてよめる

薩摩瀉我れ越來れは西の海や浪靜なる世こそ樂しき

沼の原にて讀て關守に出し侍る

治りて關も戸さゝぬ世の中と思ふ斗りに我は來にけり

宿りの子龜女に與へ侍る

萬代を契れやちきれ誓へすは龜の尾長くきれんとそ思ふ

又十一歳末に讀て與ふ

末長く榮へと祈るたらちねの心を思ひ幼けなき身も

(六七)野間の原にて關守りに讀て出し侍る

薩摩人如何にやいかに苜萱の關も戸さゝぬ世とは知らすや

眞言宗新義寶仙山成頼寺に入り、故巡撫西國使神保帶刀又西國巡見土屋忠次郎平利置とある無縁の墓へ參る。悼むべき人もあらねは寺へ香奠として白銀を置く。歌よめる

奥墓の前の淋しくたまゝに問ひ來る人もあらしとおもへは

出水の浦の天神を拜みて

行歸りかへり見まくのほしかりし神の社に入そ嬉しき

薩摩の太守の許しを受けて、明日鹿兒島出立に成る事を熊本諸子へ加筆。歌一首を寄す

梓弓矢筈の岳や薩摩かた鬼の島根に入そ樂しき

馬引平藏に笠を與へて

薩摩瀉我れ越へ來れは我れを慕ふと思ふか故に笠を與へぬ

孝子孝婦良民等を尋ねて

民草の草の葉末の末迄も恵みの露のかゝる世の中

大和とありけるによりて歌を進め侍りて

唐人の言の葉そよく敷鳥の大和と聞けは我は嬉しも

琉球の新垣なるかたへ申侍りて

言の葉も通へは通ふ古へのうるまの島も我國のこと

寛政四年夏四月薩摩國鹿兒島三官町を経て赤崎海門宅へ入る。上下にて迎ふ。吸物酒肴數を盡し飯に蕎麥出つ。侯の狩得て捕りたる鹿を臺所より寄せたり杯、侯より饗の様子にて菓子其外多ふほく食類出つ。侯も言に出て、予か來を悦ひぬと聞へし。遂に夜半迄語る。諸卿への禮也とて予盃を始るになりぬ。又海門詩歌を寄せ歌有り。爰に載せ侍る。上毛の國の平正之のぬし千里の道を遠しとせずして向はれければ、平貞幹、旅衣はるく問ひし嬉しさは包む袂に餘るとをしれ、予も薩摩山なる平貞幹のぬし包む袂にあまるとを知れと有りける返し

知る人のしるそ嬉しきはるくと尋ねし山のかいそありける

環翠軒ならの木のもとに人々と酌みて

立よれば心も清くならの葉に涼しく宿る夏の夜の月

薩摩造士館の教授山本正誼赤崎海門を始めとして、諸儒二十餘名と共に島津兵庫の別業明霞園(六三)に仙巖洞に遊び、予船中にてよめる

見し春の花過ぬれと夏の來て涼く遊ぶ舟の樂しも

赤城仙人の口吻に霞のあふるゝを見て貞幹、山人の口にあふるゝ霞みこそ五つの色の花となりけれとそ。予返し

古に例も聞かす太刀かきの劍をおへる仙人はあらし

仙人には及はしと謙退の心にて讀る。赤崎先生へ答への歌とも明霞園にてよめる

君か住宿にそ開く文の花櫻か島を詠めつるそや

當今は 明天子と恐れみ惶こみ奉りて

大君の教そ及ふ薩摩瀉鬼の根島も角や折るらん

赤崎氏島織細上布一端を予か前へ出し、是寡君より私を以て參らする也と述ぬ。吸物酒肴數々にて赤崎氏詩を寄す。諸子と語りて深更に及ふ。予讀る

圓居せることそ樂しき錦とよたゝまくおしき日にこそ有ける

言書爰に略す。四つの海八島の外も覆ふ迄君か袖より出る白雲貞幹と有りける返し。鬼界ヶ島に渡らんとして、國の守の許しあらねは斯くなん思ひつゝけ侍りて

白雲を分けつゝ、來れば薩摩瀉沖の小島に浪そかゝれる

赤城真人鬼界か島へ渡らんと乞ひ給ひけれども許しなれば、沖の小島に浪そかゝれるとなんよみ給ひし返し、赤崎貞幹、芦田鶴の翅に乗りて通はなん沖の小島は浪高くともとなん讀まれしとそ。

補陀山慈眼寺へ至り堂の西の方岩間へ入るに岩の間細く流るゝ水清し。よめる

尋ね入る谷山蔭の岩間より流れて出る水の涼しさ

二十五日楠子の忌日也とて、山下通廣、思ひ出てけふしも忍ぶ君か爲ちりより軽く身を捨し人とそ讀る返し

身を捨て残せしものは何そとよ思ひやく君を思ふこと

予造士館の諸儒に大學校の事なと語りて

不知火の筑紫の果も鳥か鳴東の國に道開かはや

小琉球なる儀榮岡に讀て與へ侍る

今日迄に再ひ逢ひぬ君と共にうるまの島に我遊はなん

予海門山へ出立赤崎貞幹より歌を寄す。雨雲を千里の外に拂へ捨て山守る神も君を待らんと有りける返し

神も待つと君か教の言の葉につれてそ登る雲のかけはし

赤城真人の牧嶽に登られけるを送り侍りて、赤崎貞幹、立歸る姿を見はや仙人の雲の衣を重ねかさねてと有りける返し

重ねつる雲の衣を見せはやなかの山姫にたち縫はせつゝ

伊勢氏の別荘に酌みて

酌かはす心そ開らく盃に櫻か島のかけそうつれる

歌を乞はれて

治れる世にも忘れぬものゝふの歌をそ聞かんことおしそ思ふ

薩摩國山川(六四)といひる所に宿り侍りて

言問ん人もあらぬやあやめ草あやめもわかぬ旅の宿りに

薩摩鴻山川となんいへる所に遊ひて主しを待かねて有りけるに今歸りぬと酌はかわし樂み限りあら
て讀て與へ侍る

五月雨や闇とはいはし面白く照れる斗りの山川の里

近衛信尹(六五)公配流の地は椿一本一つ葉一本に藤からみたり。一つ葉は上方にて草まきといふ木也といふ。海を西に受く。よめる

住捨し跡を見るにもうかりけり馴ぬ浦輪に寄るしら浪

園田二王へ讀て與へ侍る
誠ある人の心は玉銚の道を守りの神や恵まん

谷山より中村まで行々十首の歌よめる

山姫も我を待らん八重雲を千里の外をにをし開きつゝ

吹拂ふ雲の行衛は不知火の筑紫の果や鬼の根しまに

島よ島鬼の根島をよそに見て歸るはつらし親を思ふと

親を思ふ心そ厚き岩かねに朽せぬ跡や今に残れる

残し置跡は朽せしたらちねを思ふ心の筆捨の岩

岩かねもとふるほるやいかに故郷を思ふもよしや足の脱カすり跡

跡問ん人も荒磯の松の枝に波打寄る音そ淋しき

淋しくも見え渡るらん西の海の波間に獨り残ると思は

思はしよ八重立雲を鹽風の吹拂ふひまに詠へしとは

詠めつくし筑紫の果を鳥か鳴東路さして歸る樂しさ

赤城真人の枚聞山に登られる時、かくなん思ひつゝけける。赤崎貞幹、雷も手に取つへし雨雲

を分けつゝ登る人の氣色はと有る返し

例無き許しを受けて雨雲を分けつ登りしひらきゝの山

尾畔に至る。是は侯の御茶屋と号す。別莊也。尾畔をよめる

民草の休ふ尾畔の露けさを思ふ心にかく名付らん

造士館より十四五丁乾天滿天神の社へ奉る歌

今日こゝに北野の宮を拜みつゝ文の遊ひの言の葉そよき

海門先生に別るゝ時よめる

今は世に文の道をも開らきぬと花の都に君語らなん

津宮の諸賢に替りてよめる、平貞幹、いか斗り慕ふとかしる仙人の大空高くかける翅を、返し留

別歌

大空を仰けは曇る薩摩瀉人の別れにぬるゝ袂そ

又平貞幹、久堅の月の都に住人も驚く斗りさそふ仙人となん返し歌せられしとそ

小琉球の金徳に讀て送り侍る

言の葉の通ふそ嬉しいさゝらはうるまの島に君と渡らん

大島笠利間切手花部村の生年十五金徳書寛政四年五月十二日行て嗅け茶利の花の開らく時と返し
せられしとそ。

寛政四年五月十四日赤崎氏より使有り柁城の屋敷へ入る。赤崎迎へ出つ。予芝山持豊卿の歌色紙
二枚を錦水へ寄す。伊藤彌四郎板生真人對す。錦水主人禮厚し。盃酒は予始めたり。其後にしつ
ほく出つ。宮下主右衛門後れて來る詩歌の興あり。龍門陳人予に詩を寄せらる。龍門は島津兵庫
殿の事也。予に扇子一箱袴を寄せらる。直に着し侍る。錦水先生の袴を送り給ひけるに

いさゝらは我故郷へ歸らまし君か錦を送ると思へは

馬のはなむけし給ひける時かく思ひ續け侍る。平貞幹、友鶴よ又此園に來つゝ鳴け明日はいつこ
に飛別るとも。彌深く茂る緑の松の園千代も八千代もこゝに遊んと有りける返し

飛別れ又も逢はなんしるしとよ其友鶴の言の葉そよき

緑なる松の木かけにかくろひて猶幾千代も爰に酌まなん

又宮下希賢赤城の山人を松の園となんいへる所にて馬のはなむけし給へるにかくつゝける。武藏兜千里をかけて行人をまくり手にしてとめまし物をとなんよまれしとそ。五月雨のいたく降りける日高山ぬしに馬のはなむけして、平貞幹、五月雨よ心して降れさらぬたにぬれて別るゝ人の袂に、返し

さらぬたにかはらぬものを五月雨ふり別れなは袖いかにせん

君子の花となん聞へし物を見て

いさきよき心を見せて池水に浮ふ蓮の花の涼しさ

琉球館を過し時崎間筑登に讀て與へぬ

言の葉の通ふそ如何にうるまなる人の誠は我國のこと

赤城真人の別れ侍るとて、平貞幹、慕ふそよ天津みそらを芦田鶴の翅に乗りて歸る仙人と有りけるかへし

友鶴に飛別るとも又も逢ん都の春の花の契に

長谷川翁皆國常立尊の孫なれはとて悦ひけるに、天地同根萬物一體なる心を讀る

古の國常立の末なれは我もそ君と兄弟ならん

薩摩國鹿兒島演武館を見侍りて

武士の道を忘れぬ道としも治れる代に見るそ嬉しき

新納實清、圓居してけふ波かはす盃や深き契りの縁にしなるらんとそ。返し

ゑにしありてけふ波かはす盃のめくるかことにめくり逢はなん

(六六) 山田大人に別るゝ時よめる

酌かはす今日の別れの盃のめくるか如にめくり逢はなん

山下氏へ返しの歌とて

薩摩鴻からの湊は再も三度も我は見まくほしけれ

上原氏の孤島とありける唐詩の返し

別れても鳥の伎を慕ふそよ雲井に歸へる身にもあらねど

赤崎山本兩氏を始めとして、鹿兒島諸客送別の詩歌文章今日斗り二包になりぬ。實方村送送る人々三十餘名、諸君へ別れの歌山本氏へ參らすとて

今日別れ又も逢はなむ事をこそ思へはく名残をしけれ

猶送りて兵歌唄ふて別れ、いさましき事也。

寛政四年五月二十六日柁城學生多ふく來りて語る。人々案内にて町を北へ出つ。是大口道也。北の方十五六丁にして龍門高さ六十間横も同しと稱す。西に向ふ霧雨の如く散る。讀る

落瀧津瀧のもとには雲やたつと思ふ斗に見ゆるなりけり

是より乾八九丁瀧あり。兩山の狭き間より落つ此奥に瀧二段落て爰に來るといふ。奥深くいとよし名を問ふにあらず。案内たもせずして行き至り見る。瀧は南に向ふ、名なしの瀧を見て

知る人そ知るとそ思へ尋ね來て名無しの瀧を詠めつるはや

小濱大人に留め侍る歌

又も來んかち木の里に君もあれは再三度我や遊はん

學生へ止めし歌

別れても又も逢はなんと斗に酌かはしてはめくる盃

國の守の歌に浪の折かくと讀りしと聞て

波の折かくもうつくし筑紫瀉つきぬ詠めの錦江の里

宿りの主菊を活花になしてもてなしけるに

八百とせの齡を延ふと菊の花幾代ともなく我も生なん

七十一なる媼に讀て遣はしける

七十に一つ餘ると菊の花猶八百とせに君もいきなん

永治應民の歌感するか故に裏書し侍る

昨日より讀初めつるに斯く有らんとは中々に思はさりけり

錦江の邊にて鹿兒島諸君へ送り侍りて

詠め盡し筑紫の果をつくしても盡ぬ名残は盡ぬなりけり

老人に讀て與へ侍る

七十に三を重ねし身の上の身行末も樂しからまし

眞虫てうものにさゝれし者の爲によめる

祈るそよ神の御前に昆虫の禍へなすと人は知らぬに

奈毛木の杜にてよめる

治まれる世にもめぐりて來て見るに何を歎の森の下露

嵐の森を國衛の社と思ひたかへて

安らけく平らかなれば古の民を治めし跡とこそ見れ

氣色の森に雨を止めてよめる

一村の雨にしはしと立寄れば夏の氣色の森の涼しさ

雪の曙となん聞へし酒とふへて

暑さをも忘る斗りに酌酒の涼しく見ゆる雪のあけほの

徳持大人唐詩歌たひける返し、大和歌讀て參らせける

今日別れ明日は何國も不知火の鴈の便りを慕ふ斗に

林放の後に讀て與へ侍る

遠つ祖の聖に問し言の葉を守れや世々に家榮ふらん

臺明寺に至る。小寺也。天臺宗、古き文書取出て見す。住寺を良義といふ。青葉の竹切り取る事を自由になりける時によみて出し侍る

笛竹の古き昔を音に聞て尋ねし山のかひそ有りける

臺明寺に宿りて

吹入る風もあらねと夏の夜に涼しく聞ゆ谷川の水

青葉山を讀る

皇の榮行色や青葉山青葉の笛の萬代の聲

(七〇) 霧島嶽に登りてよめる

皇の始を開らく高千穂に登りて仰く天のさか鉾

兵士に讀て與へ侍る

朝な夕な忘れす思へ武士の道こそ人の誠なりけり

名無し坊となん聞へし僧の有りけるによめる

亡き人もなきからとかも名付とふ名のなきものは何と呼らん

(七一) 住吉憶原一見の時に酒店に讀て殘し侍る

今日迄も見る事もなく過ぬるに神代の昔我そ尋ぬる

住吉の社寺納の歌とて讀る

住吉の神の社を仰き見るに憶の原のあたりなりけり

高山氏なる人に馬の錢によめる。馬場親苗、今はとて別る、袖を引留て又も逢ふへき縁にしをそ

思ふ、となん有りける返し

縁にしありて又も逢はなんと斗に思はく名残をしけれ

泉川となん聞へし酒を酌み悦ひの餘りによめる

幾萬津盡ぬ例の泉川出るや清き盃の中

鳥井嶺松のもとにて

暑さをも忘るゝ斗り立寄れば神の鳥居の蔭そ涼しき

敬之のぬしの語に感して

民草の草の葉末の身なからになさけやかゝる撫子の花

中津瀬にみそきけるとて

上津瀬の教そ爰に橘の小戸の川瀬に身を清めてん

儒生に申残し侍る

繰返ししかへすくも玉鉾の道を學ひの窓開かなん

大迫元味のぬしに讀て残し侍る

古も今も替らぬ道とては親を思ふて君に事ふる

留別の歌とて

今日逢ふて明日は別るゝと斗に思ひはく名残をしけれ

高山氏へ馬の餞するとて藤原敬之、秋風の吹散らしてや白雲の心もなけに飛ひ去りにけり、と有りける返し

飛別れ又も逢はなん九重の雲井の空の花の盛りに

關東は平地山を望みて行く事を止めぬ

平らけく安らけき國に我住めは八重立雲は分も及はず

湯野宮村座論梅を見る。始め元木は失せて枝葉はひこりて地につき十餘に分る。叢の中に有り。凡十間四方の内十餘株になりぬ。歌讀る

草むらを爰やかしこと文月に梅の匂ひを尋ね來にけり

鬼附女の山にて田を臨みてよめる

梳る髪とそ見ゆる秋の來て稻葉の風そ涼しかりける

明倫堂へ讀て參らせける

玉鉾の道を學ひの窓ならば我をも人の類と知るらん

其父七郎治へ讀て寄す

大和歌學ひの窓と知れや知れ知りてそ知らん天地の道

酒とふへて悦ひの餘りに

限りなく樂しとそ思ふ盃のめぐりて歸へる旅路なりけり

高千穂にて硯に似たる岩を見侍りて

御硯の岩とやいはん神代より傳へし言の朽ぬなりけり

酌みてよめる

今日逢ふてけふ酌かはす盃のめぐりては又逢むとそ思ふ

宿りの孫女八つになりけるかおとなしく見へけるに感して讀て與へ侍る

山かつも哀れかくらし賤か屋のかきほに咲る撫子の花

やつくし米さへもあらぬ里に宿りて里の長に讀て止め侍る

すきはひも涙に暮す賤か屋の軒を並ひの山のいふせき

庄屋質直者なるか故に歌讀て與へ侍る

忘るなよ狂ぬ心の質直なる道をそ照す天地の神

肥後國なる梨坂に宿り侍りて

不知火を見んと宿りし主しとも語りつくしの旅の樂しさ

人々と集へて唐詩也とも大和歌也とも讀給へと進め侍りて

圓居して語そ嬉し秋の夜のたまくおしき唐錦かも

思ふ事有りてよめる

さてもくくとやかかくやとや世の中をうらみんものを我も知らずは

茶屋高木屋兵藏に與ふ

我こそは高山なるに高木屋と名乘にしはし休ひにけり

土屋喜、みちわかぬ深山に住る賤の男も心動かぬ大和言の葉、と有りける返し